
ETERNAL SAGA genus.

紫音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ETERNAL SAGA genus .

【著者名】

N 6 2 4 7 F

【作者名】

紫音

【あらすじ】

2012年9月27日。神は再び人間の前に現れる。

序章（前書き）

紫音です 今回エターナル一周年を記念してスピノフ作品を投稿いたします。

これはエターナルの遙か昔の物語で直接的な繋がりはないですが
間接的に繋がるつもりなので

genusは少しシリアスホラー・チックになつてると思つので全く
違つ感じの2作品をこれからも応援よろしくお願ひします。

多分紫音はエターナル関連しか出さないと想いますが気に入つてい
ただければ
嬉しい限りです。
それでは紫音の新作をお楽しみ下さい
長文失礼いたします。

これは想像もできない程遙か古の時代の物語。

まだ闇が無かつた遙か昔の宇宙は一つの巨大な世界だった。
創造神デウスは白翼を持つ天使や黒翼を持つ悪魔達と共にこの楽園に存在した。

序 章

(Prologue)

『創造書・エターナルサーク』

それは創造の神デウスが持つと言われる神の書物。
世界はこの創造書より創られたのだ。

【時】と言つ概念を持たないこの世界は

『神界デウス』と呼ばれ幾度となく破壊、再生が成された。
それは少しでもより良い世界にする為、
より良い暮らしにする為に世界は創り変えられていった。

【時】の概念が存在しない【神界デウス】

どれほどの年月が経過したのかは知る術はないが
創造書に新に書き加えられた物があつた。

それは第3の存在【人間】の創造である。

天使は燃えゆる炎から創造され

また悪魔は塵から創造された。

そして人間は【アニマの器】と呼ばれる物から創造された。

人間は天使や悪魔とは異なる肉体を持ち、物質界へ置かれた。

その世界はデウス界には無い【時】が存在し
人間はこの【時】によつて縛りを受ける。

これは創造神デウスの実験的な遊びであり

人間は様々な物を取り付けられた【玩具】なのである。
寿命もその内の一つであるがその他に
憎しみ・怒り・悲しみなどの負のファクターと
喜び・快樂・愛などの正のファクターを
何の脈略も無く一気に組み込んだ。

これにより人間は常に不安定な状態を免れなくなつた。

人間はこれを回避すべく【欲】という

安定要素を自らの手で見出す事に成功する。

予想だにしていなかつたデウスは傲慢な存在へと進化した

人間にこれ以降関与しなくなり

文字通り放置され続けられる事になつた。

神界へと繋がつていた鎖も断ち切られて

物質界に閉じ込められた人間。

人間には命に限りがある為いつかは滅びるであろうと考えた創造神デウス。しかしその考えは根底より覆された。

様々なファクターを取り付けられた人間はついに自らの種を残す要素を見出だしたのだ。神でさえも予知できなきなかつた要素…

それは交わる事…。

プラスを持つ『アーダ』とマイナスをもつ『イーヴア』

進化を2タイプに分けて互いの成長分子や能力を交じり合わせ新の種として

再び誕生させると言うものであった。

この時、初めて個人を刺す名前となるものが生まれた。

そして何世代もの世代を超えて生き延びて来た人間。

神の玩具として存在した事や神に見離された事などは昔話やお伽話として今も語り継がれているが世界の80%を超える人間は

神は崇拜すべき高貴で全能なる者として存在している。

episode 01 死の灰（前書き）

第一話です。

より深くよりシリアスを追求した結果
こんな感じとなりました。

genusは『起源』と言う意味で文字通り
エターナルの始まりの辺りを描いた物語です。
暫くはこちらも頑張って投稿いたしますので
是非見てやって下さい。

episode 01 死の灰

人間の歴史からすれば途方もない時だが
神にしてみれば一瞬の事なのかも知れない。

神は再び人間の前に姿を現そうとしていた。

それは滅びか救いか。

西暦2012年9月27日

人類史上最大の出来事となる…。

死の灰

final out

2012.9.26

pm8:30

ニュースでは様々な事件が流れていた。

殺人やテロ、誘拐など犯罪の合間にある速報が入る。

- - 突然ですが臨時ニュースをお伝えします。

最近噂されている水星が地球に衝突する可能性の件で
国会は次の様に会見を開きました - -

「ほ～ら美紅、明日面接なんでしょ？」

朝早いんだから早く寝なさい」

「…お母さん、 地球に水星がぶつかるかも知れないんだって…」

立花 美紅

21才 現在就職活動中

「最近急に軌道を変えたって世界中で大騒ぎだからねー。
しつかしあんたがニュースに釘付けなんてほんと珍しい」

「し…黙つててえ」

「明日遅刻しない様に早く寝るんだよ？」

お母さんお風呂入るから

「じゃあ言わなくていい……」

「」の前【あんな事】があつて
お母さん、ちゃんと行き先言つてねつて
泣きつこられたのはあなたでしょ「うが」

あんな事と言つるのは先日、 美紅が見た夢についての事だった。

「だつてなんか、 意味深じやない?
世界が終わる夢なんてさ……」

「あそんなコースもやつてゐ事だし、
あんた影響つけたんだよ」

「……やつだと思つたぢやあー」

「大体お母さんはずっと家にいるんだから
あんたが見た夢みたいにいきなりいなくなる事は
ないんだから安心しなさい」

「だから、 いなくなんじやなくて
消えちやうんだつて……」

「お母さん、 お風呂行つてもまーす」

「……んじゃー」

2012.9.26

pm10:59

明日の面接の用意を一通り終える美紅。
忘れやすい性格の美紅は一通り済ませても
念の為にもう一度確認する事にしている。
鞄からまた出して確認しながら入れていく。

「うん、 よしオッケー！」

明日着て行く服も…完璧！

日覚ましは…7時に設定してる！

あ！ 携帯充電しないと…！

鞄から取り出すと携帯を充電する。

これは美紅の癖なのだろうか…。

携帯を触ると必ずと言つていい程

メール受信を開いてメールが来ていなか確認するのだ。
1件のメールが届いていた。

「件名」

Re:Re:Re:

「本文」

明日の面接頑張ってね

てか何時に終わんの?
終わつたら電かメして~

「（綵つちからか…別に今返さなくていいか。
明日終わつてから連絡すれば…）」

美紅は携帯を机の上に置くと電気を消してベッドに潜り込んだ。
真つ暗で何も見えないが美紅は天井を見つめる。

「……今日は見ません様に」

そう心で言つと美紅は瞳を閉じ眠りに着いた。

2012.9.27
am3:18

突然目が覚めた美紅は起き上るとトイレへと向かう。

「（なんでこんな時間に起さめるかなーあ
しかもトイレしたくなるし…）」

トイレを済ませるとキッキンへ行き水分を取る。

「ふはあ～。

あ…またしたくなるとやだからやめとこう…」

冷蔵庫のドアを閉めて自分の部屋へ戻る美紅なのだが
少し気になつたのか自分の向かいの部屋の扉をそつと開ける。

「（おやさん…おやさんどこかね…？）」

美紅の母さすがすうと気持の良くて眠つてゐる。
安心すると血室へ戻つた。

「え…？ もうこんな時間？
やつば～早く寝なこと…？」

予定より45分遅く起きた美紅は急いで仕度を整える。

いつも慌てて焦っている時はいろんな所でボロがでるといつも。

美紅の場合、鞄に携帯を入れ忘れてしまった。

玄関へと急ぎ素早く靴に足を通す。

あむとトイレの中から美紅を呼ぶ声が聞こえ出した。

「美紅ー！ お母さん昨日言つた事また

中途半端にしか聞いてなかつたでしょー。

あなたも社会人になるんだからしつかりしないと駄目よ

んとに…お父さんが天国で泣いてるわ」

「もうお母さんー 話すんだつたら

ちやんとトイレから出てからにしてよね！

…じゃあ行つて来るからねー？」

「忘れ物ないー？ あんたよく携帯充電したまんま忘れる事
あるんだから今確認しなさい」

「 もーそんな時間ないよー！…」

そう言いながら鞄をわいつと見る美紅。
やはり親はよく気つくものである。

「あー 携帯つーー！」

母が見ていないのを確認すると靴を履いたまま部屋へ急ぐ。

「ほら言つたでしょー。だから早く寝ないからそんな事になるんでしょうがー」

美紅は携帯を入れるとまた玄関へ戻る。
そして玄関の扉を勢いよく開けて駅へと急ぐ。

「やあば〜〜！ やば〜〜〜〜〜！ 完全ち〜ぐだ〜〜」

-駅のホーム-

2012.9.27

am 8:17

家から駅まではそう遠くないが全力疾走した事により
このままでいけば間に合いそうだとホツと一息を入れる。
ホームで電車が来るのを待つ美紅は死き果てたかの様に
その場に腰を落とす。

「継つちに昨日のメール返しとくか…」

メール文を打ち返信する。

「はあ…………。

……あれえ……？ 遅いなあ……」

ホームの時計を見ると40分が過ぎていた。
それに少し焦りと苛立ちを忍ばせながら
線路側を覗き電車が来ないか確認する。

「もう～なんで大切な日にそつなつちゃうかなあ…………」

時刻は午前9時になつた。

するとホームにアナウンスが流れる。

それは事故か何かは言わなかつたがまだ遅れるのだといつ。

「ちよつと！ もう信じられない……！」

美紅は電話で事情があつて遅れると告げた。
しかし何故これほどまで遅れるのだろうか…。
大きく溜め息を吐き零すとベンチに腰かけた。

- 車内 -

2012.9.27

am9:23

「乗車の皆様にお詫びを申し上げます

本日…

繰り返し流されるアナウンスに軽く文句を吐きつつ
やつと乗る事が出来たどこかで安心するのだった。

「（遅れたけど……面接…頑張るぞ～）」

車内では噂のニュースで持ち切りだった。

普通の会話を楽しむカップルも隣の人の話を
耳で拾つた途端、話は擦り変わる。

「昨日のニュース見た？」

思わず神経を耳に集中してしまつ美紅。
聞こえとはしていないが2人の話が耳に流れてくれる。

「ああ。水星が地球に向かって来ているんだろう？」

尊じや近々肉眼でも見れるつて事らしこじやないか

「ほんと?」

「しかもいきなり軌道変えたんだつてや」

「なんか奇妙な話だねそれ…」

「まるで誰かがグイツと曲げたみたいな感じだよな?」

「まあそんな事できるとしたら神様ぐらいだらね

「（神様がもしいるんな…

そんな事絶対止めてくれるはずだもんね…）」

・ファミレス・

2012.9.27

pm3:34

面接が終わると綵と待ち合わせの約束をしている美紅。

面接は午前中に終わり、 それから綵と行動を共にしていた。

ショッピングやカラオケなどを楽しんだ後

お腹が空いたということでファミレスに寄る。食事をしながら2人は話題の水星について話し始めた。

「ねえ 美紅つち、昨日の「ゴース見た?」

「うん。なんかわーやばくない?」

「てかさ、 水星つてぶつかるとやばいの?..

「やばいんじやないの?」

「世界で話題になるぐら」いなんだからさ」

「明日もし地球なくなるんだつたらなにしようかなあ...」

「海外旅行ちょー行くとか?」

「いいねいいね ナンパされて一夜だけの関係を...
あたし外人と付き合つてみたにな」

「綵つちは面食いだからね。
でもやっぱ家にいるかもあたし」

「えー それじゃつまんないじゃーん。
あたしスキューバーもしてみたーい
インストラクターの人もちょーイケメンでさあ」

「綵つち…男の事ばっかだよね~」

「つるさあ いつ、 誰かさんみみたいに彼氏いないのあたしは~」

「……別れたよ」

「……え？ そつなの！？ いつ……？」

「もう一ヶ月なるかな……」

「……なんか……『めん』」

「ん、 別に氣にしてないし……」

「氣にしてるじゃあん！ ほんと『めん』ね？ 『めんつてばあ』

「はいはい。 ゆるしますうー」

そんな他愛もない会話が続く中、 美紅はふと外を眺めた。
まだ10月にもなっていないというのに
突然雪が降りだしたのだ。

気温が低いせいもあってか氣づかなかつたが
よく考えればおかしかつた。

「綵つち……雪降つてる……」

「ええ？ まだ9月だよ？」

「見てよー。 ほら〜」

と2人が窓ガラスに顔を近づけた時だつた。

いきなり今まで経験した事もない大きな爆発音と地震が美紅達を襲つた。

すぐテーブルに身を潜める2人。

人が悲鳴を上げる音、食器類が割れる音や建物が次々と崩壊するその轟音が一気に耳に流し込まれあまりの恐怖と不安に胸がちぎれそうに痛む。そして泣きながら綵と抱き合い声を掛け合う2人。地震の揺れは一時的なものだつた。

「美紅つち…大丈夫？」

「う、うん。テーブルに隠れてよかつたね…」

美紅達がいる店は崩壊していたが幸いにも2人は無事だつた。

しかしいろんなものがテーブルの上に重なり2人は身動きが取れない状況だつた。気持ちが落ち着いて来た所にはつと美紅は母の事を思い出した。

「そうだ…お母さん…綵つち！」

そこから手を伸ばしてあたしの鞄とれない？」

「待つて。ちょっとやつてみる」

「綵つち…これってさ…地震じゃないよね…」

「例の水星」？

「じゃないのかなあ…」

「でも、もし水星がぶつかってきたんだったら…
あつたあつた…はい！
とりあえずよかつたじやん」

「なんでよかつたんだよ～」

「だつてぶつかつても地球はなくならなかつたじやん?
もう心配ないつしょ」

「あー、そつかあ」

電話帳を開いて自宅に電話する美紅。

しかし繋がらない。

恐らく皆同じ事を考えて一斉に電話をかけているのだからないのだろうか…。

とりあえずこの場所から早く出たいと美紅は慎重にと瓦礫と瓦礫の隙間から顔を出した。

「.....」

「美紅つち、どんな感じ？」

言葉が出て来なかつた。

美紅が見た光景は日常生活では決して有り得ない光景。

映画のワンシーンに自分がいるという程度しか理解が出来ない。

本当に今見ている景色が現実とわかつたのは

倒れているいくつもの死体や重傷の人達。

右腕が瓦礫に挟まりちぎれてしまつた男性。

大火傷を負つて顔が水膨れの様に腫れ上がつた女性。

それを目の当たりにすると心臓が速く脈打ち

手足から震えが止まらなくなる。

こんな悪夢の様な日がまさか現実になろうとは
微塵も感じていなかつた美紅。

涙が止まらなかつた。

「…水星が衝突したんですか？」

「あれば…水星じゃなかつたんだよ」

「え？」

水星じゃない…。

とするならば一体何なのだらうか…。

続けて質問をする。

「空を見ればわかると思ひナビ…」

「空…？」

窓から空を眺めて見ると雪がハラハラと舞つてるのが見えた。
しかし曇つて暗い為よくわからなかつた。

「でもなんか変ですよね…」

「地球はもうおしまいだな…」

2012.9.27

pm5:35

車が急に止まった。

美紅と話してた男が気になつて呼びかける。

「おーい、何で急に止まつたんだよ」

しかし返事はない…。

「どうかしたんですか?」

「ちよつと前見てくるから」

「あ……はい」

男はドアを開けて外から運転席へ向かつた。
救助されてから何故かずっと黙つてゐる様。
気になつて話しかけてみる事にした。

「『』の先どうなつちゃうんだうね……あたしたち

「……美紅」

「ん、 なに?」

「み、 美紅……これ……」

「うん?」

綵の様子が何故かおかしかった。
どこを指差す訳でも場所を言う訳でも無く
ただ『これ』と並んで言葉を美紅に伝える。

「これって? どれ?」

「美紅……あたし達…友達だよね……。
親友だよね?」

「何よ急に……当たり前じやん……!
あたし達幼なじみでしょ」

「だつたら……だつたらさあ……美紅……」

「早くいいなって」

「美紅……あ、 あたしの足元……見て……」

足元に何があるのか？

それに綵の怯え方は普通じゃない。

足元を見るぐらい見てやるかと

身を屈め綵の膝を持つて足元を覗いて見た。

「ん…？ なにが？ 別に何も無いじゃん

ねえ綵つち、 なに…

あ、 あ、 あ、 あ…

ああああああああ…

綵の顔面が急に異常なまでに腫れ上がっていた。

よく見れば片足だけ指先から

ふくらはぎにかけて膨れ上がっている。

ゼリーのようにピーロピーロした質感が

容易に想像できる程

綵の足や顔が変形している。

綵は泣きながら美紅に訴えかける。

「美紅……美紅あたし…
どうなつちやつたの…？」

「あ……あ、　あ……あ、　ああ……」

言葉にしたくても力が出なかつた。

普段気づく事さえもない声を発する筋肉が恐怖で麻痺しているみたいだつた。

美紅は少しずつ車のドアへと手を伸ばす。

「……みくう……あた……し……たちし…
むり……言……じや……ん……」

「あ、　あやあ……」「めえん……」

勢いよくドアを開け外へ飛び出した美紅はさつきの救助隊の人を見つけ、近寄つて行つた。

不気味に変化した事を伝える為に…。

しかし本心は一秒でも早くここから逃げ出したい気持ちでいっぱいになつている美紅。
男の背中を叩いて服を引っ張ると…今出せる最大限の力を振り絞つて話しかけた。

「あ…ややが…あや…が」

美紅が男を振り返らせると
男は身動き一つ取ること無く地面に倒れた。
綵と同じくこの男も所々が膨張しているのだった。

「きやああ…！…な、なん…で…」

運転席に座っている運転手もベビーカーの赤ちゃんも
美紅以外の周辺の人間は皆綵と同じ様に変形していた。
そしてさらに気づいた事があった。

美紅は勘違いしていたのだ。

雪だと思つて気にならなかつたが今よく見ると違つていた。
それに触れても冷たくはない。
これは灰の様な物体だつた。
恐らくこの灰が人間に変異をもたらすに
違ひないと思つた美紅。

だつたら疑問が残る…。

自分は触れているのに何の変化もないのは何故なのだろうか…。

2012.9.27

pm5:59

美紅は宛ても無く走る。

周りは不気味な姿をした人間でいっぱいだった。
どこに行つてもどこに隠れても化け物だらけ。
精も根も尽き果てた美紅は次第に足が止まる。

「おねがい…夢なら覚めて…」

泣きながら力尽きた様に倒れ込んだ美紅は涙を流しながら
目の前のボロボロの人形に手を伸ばす。
灰がひらりひらりと落ちて来る。
そして辺りを静かに冷たい風が舞う。
横に倒れたまま起き上がる気力も失った美紅。
灰を払つて人形を胸に抱く。
唯一まともに見えるのはこの人形だけ。

「死にたい……もつ……いや……」

頬を伝う絶望の涙。

こうなるまでに起こうした出来事が嘘の様に幸せを感じる。
美紅の身体が灰で埋まっていく。
しかし振り扱う事は一切しない。
瞼がゆっくり閉じていこうとする中。
背中から音がした。

反射的に振り向くが動作はゆつたりとしていた。

「綺麗…真っ白」

美紅の瞳に映ったものは…

「立花…美紅だな…」

「……なん…で？……あたしのなま…え」

「あんたを探してた…

イーヴア
...
」

『イーヴア』

美紅を確かにそう呼んだ。
自分の名前も苗字も言い当たるに
イーガアとはどういう事なのだろうか…。

} 昇化 }
p r o m o t i o n

2012.9.27
pm6:42

まともに話せる相手に出合えた事で気力が少しづつ戻ってきた。
田を擦つて涙を拭き終えると再び起き上がる。

「あの…だ、誰ですか?
どうしてあたしの名前知ってるんですね?」

男は腕を組んだまま黙り込んでしまった。

見るからに怪しい感じを漂わせるこの男。

明らかに日本人ではなかつたが話す言語は日本語であつた。

「あんたを連れに来たんだ」

「あたし？」

「ここはもうじき、魔物でいっぱいになる
早く離れた方がいい……」

「ま… もの?」

美紅の問いに男は腰から銃を取り出すと
数発、近くの人間に撃ち込んだ。

突然の事と銃の鳴り響く音に見を縮めた。

「ここつらの事だよ」

「な、 なんで銃なんか持つてるんですかー?」

「イーヴァ…いいから早く準備しろ」

「もう…わけわかんないよーー!」

「……」

泣き叫ぶ美紅を見るとまた黙り込んだ男。

静かに銃をしまつと目を閉じて美紅が泣き止むのを待つた。

銀色の長髪のスラッシュした男。

彼は一体何者なのだろうか。

「……わかりました。 行きますよ」

「……ついて来い」

一言零すとどこかに向かつて歩いて行く。
美紅は警戒しながら少し離れてついて行つた。

2012.9.27
p.m7:00

そう言えどと美紅は気づいた事があった。
この男も灰に触れても変化は見られなかつた。
美紅と同じなんらかの【性質】を持つてゐるらしい。
気になつたら聞きたくなる性格の美紅は躊躇いもなく問つ。

「あのう……」

「…今はジエラスと名乗つていい」

「は、はあ。それでジエラスさんは何で灰に触れても…
その…変化しないんですか？」

「あんたの…加護の力だ」

「あ…えつと…よくわかりません」

「はあ…いいから黙つてついて来るんだ」

「あ…はい」

瓦礫の山を避けながらどんどん先へ進む
ジエラスの後についていく美紅。

彼は全くこちらを振り返る事はなくただひたすら歩く。
しかしどこへ向かっているのか検討もつかない。

崩壊したビルの瓦礫の上にポンッと身軽に飛び乗るジエラス。
地上から5メートル以上はあるそのビルに
まるで当たり前の様にやってみせたのだ。
もちろん美紅にそんな真似はできない。

「（す、す）ー…」

「何してん、早く来い」

「無理つて言つ…出来る訳ないじゃないですか」

「何故だ…」

「何故って…。普通そんな距離飛べませんで…」

するとまた戻つて来ると美紅を肩に乗せまた身軽に飛ぶ。

「ちよ…つと…降…ろしてーーー」

「ほひ…」

捨てる様にして美紅を地面に置いた。

ジエラスには気遣つ気持ちがないのだろうか…。

「い…たあ…い…！…もう最低…」

「…」

「もう…ーーー」

ジエラスはこの周辺が見渡せる場所を探していたらしい。少し遅れて美紅もその場所へとやつて來た。

2012.9.27

pm7:30

「と、と東京がめちゃめちゃ……」

「見る、始まる……」

すると周辺から地の底を這う様な呻き声と
風船を絞った様な音がそこら中から聞こえ出した。
氣味の悪い耳を塞ぎたくなる嫌な声だ。

「あの……」これからどうなるんでしょうつか

「イーヴァ、あんたも【アレ】と戦つ日がいづれ来る

「あ、あた、あたし?
む、むむむりむりむり! 無理です!」

「何故だ……?」

「な、なぜ……って、そりゃあ怖いし…
てか銃だつて握つた事もないのに」

「心配はいらん。 戦闘なら俺が教える事になつていてる。
あんたが早めに覚醒してくれればいいが…」

「そんな心配なんてしてません！」

大体、 人を殺すなんてできません…！」

「はあ。 あんた本当にイーヴァなのか？」

「だーかーらあ！ そのイーヴァって誰なんですか！？
あたしの名前は立花美紅つてさつき貴方も」

「イーヴァは誰かではない…。
まさか転生が失敗したのか？」

「は？ て、 てんせい？」

ジエラスはまた黙り込んでしまつた。

「あの、 地球はどうなつちゃつたんですか？
綵は変な…化け物になつちゃうし…」

「…………」

「綵…「ごめんね…あたし最低だよね…親友だつたのに…
いつもずっと一緒にだつたのにね…
助けてあげられなくて…」「め…ん…」

美紅は綵が目の前にいるかの様に話し始める。
綵とのこれまでの思い出が甦つて来る。
不思議なものでいくら喧嘩をしても
思い出す部分は楽しい部分であった。
ジョラスは不思議そうに美紅の顔を見つめる。
何か言葉が今にも出てきそうな表情だ。

「な……なんですか……」

「その……綵とやらは大切な仲間なのか？」

「な、仲間……つてか親友……」

「だつたら助ければいい……今ならまだ間に合ひ」

「ほんとですか！？ でも助けるつじやつじやつじ……」

「はあ。 あんた……さつきの事と言ひ

本当に何もかも忘れたんだな……。

だから100サイクルは無理だつて言つたんだ……」

聞き慣れない単位が出て來た。

100サイクル……。

考えるより先に口が前に出る美紅はもう少く
ジョラスに疑問をぶつける。

「忘れたつて…知らないですよ！！

大体その100サイクルって何ですか？
どこの国の単位ですか？？

聞いた事ないですよサイクルなんて

「もういい…。じゃあ今日は俺がやるから」

「…はあそうですか」

「連れてくるからここで待つてろ」

「はい、 お願いします。
えっと特徴は…」

「もうわかつてゐから」

「え？」

そう言うとまた身軽に飛び降り、 走つて行つたジエラス。
驚く事に物凄いスピードで駆け抜けて行つたのである。

美紅の目では捉えきれない、 そつまるで消えたみたいだつた。

「あの人…絶対人間じゃない…」

暫くすると綵を抱えたジヨラスが
いきなり下から上がつて来た。

「美紅～！～！」

「綵～！「めんね～！ ほんと」「めん」

綵は既に元通りとなつていた。

ジヨラスは一体どうやつて彼女を治したのだろう。
しかし今は素直に再会を喜ばずにはいられなかつた。

「……綵とめり」

「え、あ、あたしですかあ？」

「あんたも俺達と来るんだつたら
戦術を学んでもらいつ事になるが……」

「え、綵も～？」

「見た所、長年イーグラと時を過ごした事で
靈力が増した様だから少し叩き込めば
靈術を使いこなせるよつになるだろ」

「は、 はあ

（ねえ… 何の話？）「

「（さあ意味不明…）」

「では共に来ると言つ事だな？」

「あ…は、 はい！ お願いします」

「少し待つてね…」

「あ、 デジラスはビルから飛び降りてどこかへ消えて行った。

「ね、 デジラスは治してもらつたの？」

「うーん、 それが氣を失つてたみたいなんだああたし…

「そつか…」

「でかさてかさてかさ、

あのジーラスって人ちょーかつによくない？？

「えー、 あんな無愛想なのがいいの？？」

「ばーか、 それがいいんじゃーん」

「でも変な人だよ？」

あたしの事イーヴアとか何とかって…

「なにー? イーヴアって」

「しらなーい

「ねねねねえ、 あの人彼女いるのかなあ?
何才なのがなあ ねえ美紅う」

「知らないってあたしもついさつき初めて会ったんだから

「可能性ありそう? あたし」

「なに…なんの可能性?」

「あ! 聞いてなかつたなあ!!
んもう…美紅はいつも中途にしか聞かないんだからあ

「うー、うめーん! いろいろあつて疲れてるんだって…」

「うん…疲れるよね…

「こんなのマジ映画でしか見た事なかつたから…」

話が萎んできた所でジェラスがタイミングよく戻ってきた。
両手に黒いアタッシュケースが見えた。

「待たせたな…」

「あ、ぜ、全然大丈夫ですからあ！」

ジョラスが一つ田のアタッシュケースを開けた。中が気になつて2人はジョラスの背中越しからそつと中を覗き込んだ。

「（なにあれ…）」

「（…なんだろ）」

ジョラスは中からある金属を2つ取り出すと2人に渡した。

「え、あたしにもくれるんですかあ！！
ありがとうございます」
大切にします」

「…飲め」

「…え、えつ！？」

ジョラスから渡された物は銀色の小さなイヤリングの様な物だつた。丸い玉にチエーンがついた感じの物体。これを飲み込めと言つ。

「飲めつて……なんなんですかこれ」

「それが昇化を手伝ってくれる」

「し、消化を手伝つて……？」

「いいから飲み込むんだ」

2人は顔を見合させながらセーの飲み込む事にした。
チエーンの様な物を摘んで口の前まで持つて来ると……。

「美紅いい？」

「うん……せー」

「のー」

口を開けて一気に飲み込んだ2人。

喉元を過ぎ食道を通るのが感覚で伝わつて来る。

「美紅……どう?」

「ん~別に……ー?……あ……か……かはつ」

「み、みく!?……か……あ……あつ……い……」

2人に異変が起きた。

胃の辺りが激しく痛む。

熱くそして激しい頭痛で声も出せない。

息が出来なくなりやがて2人はその場に倒れ込んだ…

episode 03 離脱（前書き）

まあこれは小だしにあるつもつなので。

episode 03 離脱

どれくらい経つただろうか。

美紅と綵が意識を失つて数時間…。

彼女達の身に一体何が起こったのだろう。

離脱

2012.9.28
am1:01

突然2人の目が開いた。

目覚めたと言うよりは悪夢を見て飛び起きた様な感じだ。

無言のままムクッと立ち上がる要約口にする。

「どうやらうまく昇化できた様だな」

「美紅大丈夫？」

「うん、うん……綵……なんか景色……変……じゃない？」

「あ、美紅もそう思つた？
なんか青い粒が見えるあたし……」

「うん、あほら、そこに見えるよね」

「……それは靈氣だ。

まさかそこから説明しないと駄目なのか……」

「靈氣……」

「み、み、みくみくみく……
上見てうえっ……！」

「な、なに？ うえ？」

綵に言われた通り上に田を向けると

想像以上の風景がそこにはあつた。

遙か上空に地球を覆いそうな程巨大な物体が見えた。
ここからだとほんの一部しか見る事は出来ないが
それでも何という巨大な物体であるうか。

「あんなのさつままで無かつたよね？」

「な、なんなんですかあれは……」

「あれは……神界だ。【神界】テウス】」

「しんかい？」

「創造神】テウスがいる世界だ。

」」」で言つ……天国の様なものだな」

「神様？」

「……なのかなあ」

「見える理由は昇化し、靈力が解放されたからだ。
あんた達は非物質的な物を見るんだ」

「（ひぶつしつつてなに美紅……）」

「（ん～簡単に言うと見えない物が
見える様になつたつて事じやないかなあ……）」

「テウスはアーダとイーヴァを探している。
恐らくその目的は俺達【エテリア】と
人間の【器】の回収と消滅させる事…
器がなければ再生されないからな」

「（見えないもの？ 例えば？）」

「（……幽靈とか……）」

「（ゆ、ゆうれい……ええ、なんか怖い）」

「（でも、幽靈つて見えなかつたから
怖いだけで見えてしまえばそんなでもないよきっと）」

「今の俺達に、テウスの世界に存在できる靈力はないが
イーヴア、あんたが覺醒したら十分に維持できるはずだ。
あんた達の力を借りて【アレ】を奪つんだ。
そうすれば、テウスに怯えなくて済む。
その為にも早くもう一人のアーダを見つけないとな……」

「（でもどんな風に見えるんだる…。
首がないとかよくテレビで見る
ああいうのだつたらやだなあ…。）」

「…おい、聞いてたか？」

「え？ あ、は、はい！」

「はあ。 とりあえずここにいるとすぐに見つかるから
【ラピュラリス】まで急ぐぞ」

「は、はいーーー。」

ビルから2人を降ろすとジエラスは
アタッシュケースを手にまた歩き出した。
2人はその後ろをついて行く。

2012.9.28

am 2:15

銀色の長髪をなびかせながらどこかへと誘うジエラス。綵は彼の事が知りたくてたまらなかつた。

後ろ姿をじつと眺めていた彼女は思わずこんな質問を切り出した。

「あのう…ジエラスさん?」

「…………なんだ」

「ジエラスさんって何才なんですかあ?」

「…………大体でいいなら言うが…………?」

「だ、 大体…………いくつなんですかあ?」

「…………8サイクルと5兆6千億…………」

「…………あ、 え、 えと、 ああの…………」

「すまん…………大体しかわからん…………」

「あ、い、いええ！ ゼーんぜん！

おせー おせーおせー おせー

「ジエラスさん… そのサイクルってなんなんですか？」

「…………1サイクルと言つのは
星が誕生して滅ぶまでの期間だ

「
^
?」

「少なくとも8回再生と消滅を繰り返してゐる」

「す、凄すぎてわからなくなつてきた……」

「ね

「地球のあらゆる文明はある一定以上で成長が止まる様に決まってるんだ」

「何で決まつてるんですか？」

「創造神がそう決めたんだ。

エターナルサークルを使ってな……」

「は、
はあ…」

「（ねね美紅つち、エターなんとかつて？ なに？）」

「（あたしが知る訳ないじゃん！！）」

「ちなみに、この宇宙の歴史は約400サイクル。地球は次で17サイクル目に入るらしい。あと3年程で人間の文明が終わりを迎える。1万年もすればまた人間が誕生し、文明を築くだらうな」

「じゃあ人間の歴史ってずっと繰り返されてるって事なんですね…」

「そうだな…」

「（な）にい、美紅…あんた理解できたの…？」

「（まあなんとなく…）」

2012.9.28

am4:31

かなりの距離を歩いて来た3人。気づけばもうすぐ夜明けであった。へとへとで途中で休憩したいと

2人はジョラスに提案するものの死ぬか生きるかの2択を突き付けられてしま葉を返す事はできなかつた。そんなこんなでやつとの事到着したのだが特に周りには何もなかつた。

「ここですか？」

「……正確に言えばこの場所じゃない。

」」」から先はセパレーションしてしか進めん

「セパ…レーショ…」

「肉体を捨てるんだ。やり方は教える」

「ええ～幽靈なつちやつがあたし…」

「いいから…もう時間がない」

「継、とりあえず頑張ろ? ね?」

「う、うん」

「」」れを見る」

ジョラスは円いわつかを2人に見せた。

「JRの田の内側に入るイメージをするんだ」

「（イメージ……）」

暫くすると美紅の頭からもう一人の
美紅がまるでヘドロの様に少しずつ出て来た。
青白い光を放つ美紅の光体は肉体が
自分に吸収されると光が落ち着いて来る。

「流石だな。 そう、 それがセパレーションだ」

「み、 美紅～あたし無理～できないよ～」

「綵、 諦めないでよ～ ほらもいつかいやって～」

しかし何度も試しても綵にはできなかつた。

「駄目だ。 もう時間がない」

「ち、 ちよつと～～

まさか綵を置いて行くじゃないよね～？」

「わかっている…早く肩に触れや」

「…………？」

するとジエラスと綵は同時にセパレーションし光体へとなつた。

すぐにジエラスは両手に力を込める。

彼の身体から水色のもやが見えた。

そしてそのもやが掌へ収束していき田の前に

広げると光の渦に変わった。

「早く入れ」

美紅と綵はお互いの手を絡ませ田を粒りながら飛び込む。

ジエラスが最後に入ると光の渦は縮小していき

やがて消えていった…。

「…着いたぞ」

空間から抜けたそこは別世界だった…。

ラピュラリス
L a p u r e l i s

美紅と綵は我が目を疑つた。

何故ならそこには何もなかつたからだ。

【無】という言葉がこれ程似合う場所が
他にあつただろうか…。

どこを見ても暗き闇が広がる世界だった。
美紅も綵も口から言葉が出ない。
と言つよりも思い付かないのだ。
明かりを消すそれとは全く意味が違う。
景色も音も何も存在しない世界

ラピュラリスト。

「...がラピュラ里斯ですか？」

「…そうだ」

「あ、あのね。な、なにもみ、えないです……けど……」

「何故だ？」

「な、なぜ……つて……」

「へ、暗いからに決まつてゐじやないですかあ――！
や、やだなあもお…あははは…」

「何故暗い？」

「え？」

「何故暗いかと聞いてるんだ」

「ちよつとジエラスさん！！
いい加減にしてください！！！」

「じ、じゃあジエラスさんわあ
一体何が見えてるんですかあ？」

「…草原だ」

「草原？」

ジエラスは草原が見えているらしい。
草原どころかお互いの顔も見えない
この場所の何処に草原などがあるのだろうか…。

だが次の瞬間…。

「あ…！」

「うわあー！」

2人は声を揃えて驚いた。

なんと今まで無だったこの場所がいきなり
緑生い茂る草原へと変わったのである。

「なんで…やつ今まで…」

「そ、草原が見える…」

するとジヨラスは少し言ごとにくわづ口を開かした。

「す、すまん…言つ忘れた」

「え？ 言い忘れたって？」

美紅が即座に切り返す。

「当たり前の事で考えもしなかつた…。
あんた達【時】に縛られているんだつたな」

「え、えとお、言つてる意味があ…あはは…」

「俺は【時】の呪縛から解放された世界の人間だから
気づかなかつたんだ…すまん」

「は、はあ…。それで何を言つ忘れたんですか？」

「…【時】の無い世界はイメージで
成り立つてゐる世界なんだ。
イメージしなければ何も見えない」

「イメージ…ですか…」

「さつきあんた達が見た草原は俺のイメージ。草原と言つキーワードであんた達が想像したから見えたんだ」

「そつ言えば聞いた瞬間に…」

「だから2人とも俺が見える草原とは違う草原が見えているはずだ」

「ジエラスさんじゃあイメージすれば…例えば砂漠とかになつ…」

そう美紅が話し終える前に辺りは砂漠となつていた。

「な、なつちやうんですね…」

「だが気をつける、イメージは靈力の源。想像は靈力を消費するんだ」

「靈力を…」

「あまり景色で遊んでいると
そんな少ない靈力しか持つていない
あんた達ならあつという間に疲労するから」

「みい～く～」

“ひつやら遊びすぎた者がいたよつだ。

「あ、綵うち、ちょっと大丈夫！？」

「…そつ、 そうなるから氣をつけるんだ」

「は、はい…」

「はい…。～ああ日が回る…」

そらにジョラスは付け加えた。

64

「あと、【時】が無い世界は文字通り時間が存在しない。
寿命が100年未満のあんた達

【時の住人】は年を取らない。

俺には実感はないがあんた達なら理解できるはずだ」

「ええ！？ じゃあ…」

「老いて死ぬ事は永遠にない」

「…み、美紅！？ やつたじやん

あたし達21才を永遠に保ち続けられるんだあ

「

「う、うん…よかつたね。綵

「えー嬉しくないのぉ？」

「うーん…なんか…怖くない?」

「ちなみに言つておくが…。

【時の世界】、つまり地球に戻ると時間は存在するからまた縛りを受けるんだからな。

一応言つておく

「はー…。あの、それでこれからどうするんですか?」

「どうあえく、【マコスナティア】に会つんだが…。その前にまずあんた達が靈力を自分の意思でコントロールできなければ話にもならん…」

「靈力をコントロール…」

「だからまことにで靈力のコントロールを身につけてもらひ」

「それでどうやるんですか?」

「はあ…。まあ待て…。

さつきみたいに勝手にイメージをされて倒れられては効率が悪い」

「す、すいませえーんーー!」

「だからイメージを統一をせてもうひ

話が終わる直後に景色が変わった。

それは2人が大変馴染みのある景色だった。

「あんた達の記憶を探つたところ…。

訓練する場所はどうやらこれが相応しい様だな…」

「相応しいってか…」

「ふ、ふつうに…学校…なんだけど…」

「…来い」

2人の前にあるのはまさに2人が通っていた学校そのものだった。

見覚えのある校舎など当時の記憶が甦つてくる。

門からグランドへと入り廊下を渡つて教室へと向かう。

「でも…何で中学校？」

「あんた達の記憶の中で強い結び付きがあつたからだ
綵あ中学校で、なにかあつたつけ？」

「わあ…せんつせん覚えてないからさあ

「陸斗と言う男が関係している様だな」

「つべと…………あ……」

「なになに～ 美紅つか」

「駄目……い、 言わない……」

「な、 なにそれ……ちょっとビーチー事なのよ……」

「だめだめ！ 絶対言わない」

「ちょっと美紅ー！ 親友だよね！？
隠し事なんて許さないんだからあ……」

「あんたに内緒で付き合つてたそつだ

「なー.?」

「みー～～～！ それほんとなの～～」

「……嘘も何もない。 記憶だからな」

「ちよつヒー…… ジョラスさとつ……」

「みー～～～！～！」

綵の冷たい流し田が美紅に突き刺される。

「だ、 だつてさあ、 もう何年も前の話じやん……」

「ひどい……！ 親友だと思つてたのに……」

「…中に入れ」

教室の中に入るとまたさらに驚く事があった。机の中には教科書などがちゃんと入っていた。通学用鞄や体操服、ほつきや黒板消しなど事細かに再現されていたのだ。

これはまさにタイムスリップした様だった。

「すいご……」

「じゃあ今から訓練を行つ。
適当に座つてくれ」

「うあ～なつかしいなあ

「あたしい朝いつも寝てたなあ……。
高橋にチョーク投げられてさあー！」

「おい、始めるから……」

「あ、は、はい！ ……すみません」

いよいよ靈力コントロールの訓練がはじまつた……。

episode 05 霊力(前書き)

涙あり笑いありたまにシリアルホラーのETERNAL SAGA
genus・これからもよろしくう

episode 05 靈力

つい夢中になつて時間を忘れてしまつた…。
こんな経験はないだろうか。

好きな事や夢中になつている事をしている時、
人は時間を忘れる事がある。
もしかしたら人間はその間…

【時の世界】から逸脱しているのかも知れない。

靈力

s o u l e n a g y

- ラピュラリスト -

教室で靈力について聞いている美紅と綵。
まるで授業の様に話が進んでいるが
内容はその雰囲気に合わない
今まで聞いた事もない靈力について。
さつきまでふざけあつたり景色に懐かしむ2人であったが

真剣にジョラスの話をその耳に入れる。

「…靈力は3つある…。

物質化、浮遊、イメージ。

どんな靈術にも必ずこの3つの靈力が必要なんだ」

「はい」

「（ぶっしつかに… イメージと浮遊）」

「靈力はイメージ、つまり想像する力がまず基本、
次にそのイメージを物質化させる…
目の前に想像した物を創り上げる力だ
そしてそれを操作する力、浮遊。
この一連の流れで靈術を扱う基本が生まれる」

「…はい」

「（えと、想像して物質がふゆう…
え、想像して浮遊させたものが物質…
ちがうちがう、浮遊した物質が想像力の基本…
あー！ わけわかんない！）」

「慣れればこんな事が出来るようになる」

「…？」

ジョラスは無造作に左手を2人の前に出して

力を入れ、掌を上へ向けると手が青く輝き出した。

「光つた…」

「綺麗…」

「この光は靈氣…あんた達も見た
あの青い粒を集めたのがこれだ。
この状態がイメージ、そして…」

掌に再び力を込めるとなにかが球となつた。

「あ、ボールみたいになっちゃつた…」

「…これが物質化だ」

「ちよつと触つてみてもいいですかあ？」

「今のあんた達には触れん」

「え…ちよつといいですかあ」

綵はゆっくりとその球に手を近づけた。
しかし綵の手はそのまますり抜けてしまつた。

「ほんとだあ…触れない」

「…最後は浮遊。

きつとこれが一番難しいだろ」

また力を込めるジエラス。

段々興味が出て来た2人は次はどうなるのか
楽しそうにまた真剣に見つめる。

「う、浮いた…」

「」これが浮遊だ

「なんかあ手品見てるみたいだよねえ」

「」れを素早く出来るようになると…

そう言いながら一度靈氣を元に戻すと、
また左手を今度は横のドアに向けた。

そして掌から先程の青い球がドア自掛けで
勢いよく飛び出したのだ。
命中したドアは穴が空いた。

「す、す」「」

「あ、ああ六…空…いや…た」

「「」れが靈力の基本だ。 わかつたか？」

「あんなす」」事ができるんですか？ あたし達」

「出来るか出来ないじゃない… やるんだ」

「は、 はあ…」

「美紅つち、 頑張ろつね 」

地球からこの地へ来てからどれ程の時が経ったのだろう。この世界にいる限り知りようがない事だが

美紅と綵は失敗を何度も繰り返し続け

既に2000回を超えた。

イメージと物質化までは2人共容易にクリア出来たがジエラスが言った通り【浮遊】でつまずいていた。

あつさりと進んで来たぶん、 相当難しく感じるよつだ。

「あ、 またダメだ…」

「ああ～もうやだやだやー」

「……」

美紅は掌に意識を集中させ靈氣を作ると

それを物質化させて球を作る。

ここまで間違う事なく出来る。

失敗してか2人共既に当たり前の様に
感覚で出来る様になつていった。

「ダメだ…なんかいやつてもダメだよ…」

「ジエラスさん、本当にあたし達つて
靈力使える様になるんですかあ…。
才能ないのかなああたしい…」

「……素質の問題じゃない。

教えるのは簡単だが…それでは意味がない。
もう一度考えろ。靈力の基本を…」

「靈力の基本…」

「ううん…靈力の基本わあ…」

2人はジエラスの話を思い返した。

靈力とはイメージ、想像力が必要不可欠。
物質化にしても浮遊にしてもイメージする事が基本。
それを踏まえた上でもう一度試してみた。

すると…。

「で、出来た…できたああ…！」

綵の掌の光の球は見事に浮いていた。

苦労しただけあって成功すると

心から溢れる程の喜びが込み上げてきた。

瞳に軽く涙を浮かべながら美紅に報告する。

また美紅も成功していた。

「…あんた達が何故そこまで浮遊に手間取ったのか
わかるか？」

「基本はイメージなんですよね～」

「そそ！ 想像力～」

「そうだ。だがそれだけが出来なかつた理由ではない

「え、何ですか？」

「あんた達は何回も失敗したせいで
自分には出来ないのかと思い始めた。
何度も言つが…靈力はイメージする事が大切なんだ。
【出来ない】と思つてる限りでakin」

「なるほど…なんかわかつた気がします…！」

「ね！ 精力には自信も大事だよねえ」

自分を信じる事…。

人は失敗が続くとすぐに自分を見失う。
そして他人のせいにしたりなど
自分から目を背ける脆弱で愚かな生き物だ。
しかしこれでも見方を変えるだけで
それは自信に繋がるきつかけとなる。

美紅と綵は靈力を通して自分を信じる事が
いかに大切なものであるか改めて思った。

自分を信じる事は【力】になるのだと…

episode 06 マロスナティア（前書き）

ここから先は段々と深くシリアルになつていきます。
好みがわかれ内容になつていいくので
予めご了承下さい。（――）

episode 06 マリスナティア

無事靈力がコントロール出来る様になつた美紅と綵。ついこの間まではショッピングしたりカラオケに行つたりと普通に生活をしていた何処にでもいる若者2人。

神が存在しこの様な世界がまさか本当に存在するなど針の先にも思つていなかつただろう。

しかし彼女達は、 その世界の一部分を見たに過ぎなかつた…。

マリスナティア

・ラピュラリスト

イメージは解放され元の闇へと戻つた。
美紅や綵、 ジェラスが今

何をそこに投影しているのかはお互いわからない。

ジエラスはマリスナディアに会つと言つた。

しかしこの何も無い世界にいるのは彼等だけ。

一体どうこゝう事なのだろうか。

そしてどういう人物なのであらつか…。

「もう一度言つがマリスナディアの元へ行くには
靈力のコントロールができなければ存在できない。
今のおんた達の靈数なら問題はないが…「つま…」

「靈数つてなんなんですか？」

「……はあ」

「す、すいません…！」

気になつたら聞きたくなつちゃう性格なもんで…！」

『考えるよりも聞け』

これが立花美紅の性質である。

一人で考え込むなら聞いてしまえといつ

美紅のやっかいな性格。

この様に例え話の途中であつても我慢できなくなり
ついつい口のひもが緩む。

ジエラスは溜め息を吐きながら丁寧に説明を始めた。

「…靈数とは靈力の量の事だ」

「靈力の量…」

「その量が…えと、マリスナディアさん? となんか関係しているんですかあ?」

「そうだな…マリスナディアの元ヘゲートを繋ぐのに維持しなければならない靈数は大体で8~9…。あんた達はそれを超えてるから」

「あたし達いくつなんですか?」

「イーヴァ、あんたは…23だ。

継…だつたな、あんたは…20だな」

「えーなんであたし美紅より低いんですかあー」

「仕方ない…靈力を初めて解放したんだ。それにイーヴァは覚醒していないとは言え少なからずとも基礎は出来てたからな」

「…そのイーヴァって呼ぶのやめてもらえますか~!」

「…何故だ?」

「ああーもー!ー!ー!ー!

あたしの名前は立花美紅だからですー!ー!

「まあまあ美紅つちー…」

「…そつか…わかつた」

「それで……」

「……なんだまだあるのか……」

「その靈数つてどうやって見えるんですか?」

「……そうだないづれ身につけなければならんからな
いいだろう。

……これも基本は靈力の使い方と同じだからすぐできる

「……はい」

「じゃあ2人共向かい合つて

言われた通り向かい合つてみた。

「今まで靈力をイメージ、物質化
そして浮遊と言う形で使って來たが
それを浮遊、物質化、最後に
イメージと言う形で靈力を組む。
相手に送るイメ……」

「ほ、ほんとだあ……。
美紅……23なんだ」

「うん……なんか数字が頭に浮かんでくるね」

「そうそれだ、あんた達あれだけやつたから既にコツが入つてたのかもな」

美紅の性格と似たような部分をもつ綵。

一緒にいつも過ごして来たからかそうでないのか綵もまた気になると知りたくなる性格らしい。

ただ彼女の場合は好意を寄せせる者にだけなのだが…。

「（ジエラスさんの靈数調べちゃえ…）」

綵はジエラスの靈数を調べはじめた。

体重計の数値が前後する様なそんな感覚が頭にフツとよぎる。だが暫くすると何かにぶつかった様な衝撃を受け綵は吹き飛んでしまった。

「いっ…たあ…い…」

「え！？ び、びつじたの急に…」

「あんた…俺の靈数見ただろ？」「

「あはは…バレちゃいましたあ～」

「靈数の差があまりにも激しいとそつなる。

あんた…俺が抑えてる時でよかつたな…

戦闘時だつたら消滅してたぞ」

「し、 消滅つて…」

「きや、 きをつけます！！」

「そんなに知りたいなら教えてやる。
俺の靈数は…… 9万だ」

「き、 9！？」

「9万…」

「もういいか？ 他に質問がないなら行くぞ。
こんな感じでは一向に進まん…」

そう言つとジエラスは地面に靈力を放つた。

青い光が地面に溶け込んで輝き始める。

そして暫くすると光が收まりその地面はガラスの様な透明な床へと姿を変えていた。

「…今から俺がやるから同じ様に靈力を使え」

「あ、 はい」

ジエラスはガラスの中心まで移動すると両手を地面に向けて靈氣を集め始めた。
そしてジエラスを中心に靈氣を少しづつ広げて行く

それが丁度透明な床と同じ辺りまで広がると靈力を放つた。
床が強く光を上げながらジエラスを包む。

「…向こうで待ってる」

「…え…？」

一言い残したジエラスは光と共に消えたのだった。

「あ！ ちょっと…」

「ええ…！」

ジエラスは2人を置いて何処かへ消えてしまった。
果たして美紅と綵は無事にここから
ジエラスの待つ所へと行けるのだろうか…。

「み、 美紅… やり方わかった？」

「…と、 とりあえず… やってみよっか…！」

美紅が床の中心へとやつて来た。

「えと、確か…。

「こんな感じだった様な…」

すると光が床から美紅へと昇つて行く。
どうやら成功した様だ。

「や、やつた…出来た…」

「馬鹿…やつたじやなこよ…ビツザッたの…？」

「えへつと…なんかひろげ…」

説明の途中に美紅は消え去ってしまった。

綵は美紅の名前を呼び続けるが意を決したよう
くぐりながらも床の中心へと向かつて行くのであった。

ジエラスの元に移動できた美紅は
すぐさま引き返そうとするが…。

「心配ない、必ず」ここにやつて来る」

「でも綵、…わかつてなかつた気が…」

「感覚でわかるようになつてゐるから。
あなたも感じたはずだ」

「（そう言へばあの床に乗つたらなんとなく…）」

暫くすると綵も無事に到着した。

暗闇の空間からワープして来た場所は何かの建物の中だった。
ジエラスが外に繋がる扉に手をかけゆっくりと開く。
建物から出るとそこは庭園の様な場所だった。
ここも時の無い世界。

しかしこの様な美しい庭園をイメージ出来る程
2人は想像力豊かではない。

いや、そもそも地球には存在しない景色なので
いくら想像豊かでも決して作り出す事はできないだろう。
ここはそれほど美しかつた。

「…予め言つが、ここはマリスナディアが支配する空間だから
いくら想像しても景色は変わらんからな」

「…は…い…」

「……綺麗…」

「……うん……なんか……泣けてきた……」

「うん……あたし……もお……ちょーかんどうじょ……る
「の

鳥肌が立つ程の美し過ぎる景色に涙する2人。光はふんわり淡い色の丁度いい色合い加減。まるで恋をしているかの様に心臓が高鳴る。トキメキは2人に感動の涙として

彼女達の頬を伝つていき、やがて溶けていった。

「そ……れで、その……マリスナティアさんは？」

「……あそこ……神殿がそうだ」

「あ……あそこ……？」

「真っ白……だあ

庭園を後にすると少し歩いた先に純白の建物が見えた。

その建物に近づく度に罪悪感が芽生え感じずにはいられなくなっていく。

この様な美しい空間に自分は存在しても良いのだろうかと…。胸が締め付けられていく思いだった。魂をわしづみにされている感覚。

そして神殿の前までやつて来る頃には

2人共この先にいるマリスナデイアを
神という存在として頭に刷り込んだ。

10メートル程の真っ白な扉を両手でゆっくりと開くジェラス。
この扉の巨大さにも驚いたが
何よりもその扉を開けたジェラスに驚愕した。

「…この先だ」

神殿の中も素晴らしい。

入つてすぐの所の中央から赤い絨毯が
真っ直ぐに先が見えなくなるまで延びていた。
天井は果てしなく高い。

マリスナデイアとは巨人なのだろうか…。

それに塵や埃が一切見られなかつた。

芸術の二文字では例え切れない程の建物である。

「この先に…マリスナデイアがいる」

巨大な扉の前で足を止めたジェラス。
この先にマリスナデイアがいる…。
ジェラスは美紅達に振り返る事はなく
白い扉を眺めながら話し始めた。

「一つだけ言つておきたい事がある…」

「はい…」

「言つておきたい事?」

「…これは大切な事だから真剣に聞いて欲しい…」

「…わかりました」

「マリスナデイアは創造神デウスと対になる存在なんだ」

「…じゃあやつぱり神様だつたんだ…」

「だよね…

「あたしもさつきからじつじやないのかなあつて…」

「破壊神と呼ばれている

「は、はかい…しん」

「どんな神かは言わなくともわかるだらつ…」

「じゃあ…悪い神様なんだあ…」

「…何故だ?」

「あーまたはじまつた~」

「…神に善悪も何もない。」

「破壊が何故悪なんだ?」

何故悪とそう決めつけられる……？」

「そ、それ……は……」

「真に、この宇宙に善や悪と言つ秩序はない。それは人間が勝手に作り上げた幻想だ」

「ジエラスさん、それなら正義って何? つになつちやうじやないですか……」

「俺は正義の為に戦っているのではない。そもそも正義なども存在しない……」

「じや、じやあジエラスさんは……？」

「一体何の為に……？」

「……そう言つ役割で生まれてきたから」

「役……割……?」

「話がそれだが……。

とにかく破壊神マリスナデイアは創造神デウスと対を成しデウスはマリスナデイアを滅ぼそうとしている」

「神様もケンカ……するんだねえ……」

「マリスナデイアは……今……」

存在が…消えかかっている…」

episode 07 大いなる存在（前書き）

調子がいいので暫くはmenusをUPしていきます。
ETERNAL SAGAはもう少し待ち下さい。

m () m

episode 07 大いなる存在

人は一体何の為に生きているのか…。

答えはいたつてシンプルなかもしれない。
短い人生の中では幸せに向かって生きているのだ。
では幸せとは?と聞かれた時、恐らくすぐに
答えられる人はそう多くはないだろう。
何故なら人間とは決して満足を得られない生き物であるからだ…。

「 大 い な る 存 在 」
G r e a t e x i s t e n c e

- ラピュラリスト -

「 存在が…つて…。

死んじゃうって事なんですか!-?」

「死ぬ…とは少し違う。

あなたの言う【死】とは…

肉体の消滅の事だろ?」

「あ、 はい… たぶん…」

「そうではない。

肉体の死はいすれ再生される…。
マリスナデイアは魂そのものが消えかかっているんだ。
存在そのものが無くなる」

「… そ… うなん… ですか…」

「神様… な… に… い… ?」

「… 何… か勘… 違… い… し… て… い… い… か… ?」
神を何だと思つて… いる?」

「え、 神様つて言… えば… 。
全知全能つてよく聞… きますけどー」

「人間を創… つた… と… か」

「… 人間を創造… した… 事… は… 確… か… だ… が… 全… 知… 全… 能… で… は… ない… 。
何… 故… な… ら… 神… も… ま… た… 創… ら… 被… た… 存… 在… だ… か… だ… 」

「神様も!… ?」

「… マリスナデイアの存在が消… え… てしま… う… と…
俺やあんた達人間にも影… 韻… が… 出… る… 」

「… どう… なる… ん… で… す… か… 」

「もう既にその予兆が始まっている。
あんた達地球で見ただろ……」

美紅はすぐに理解できた。

そう……

人間が醜い化け物と変形していた様を
ジエラスは言っていたのだ。

頭に沸き上がつてくる数々の異形の者。
足や顔が膨れ上がつた時に見た綵の姿。
マリスナデイアという存在が消えると
人間はどうなってしまうのだろうか……。

「灰の影響かと思つてました……」

「あの灰は……マリスナデイアの魂紛だ……」

「「」ん……ふん？」

「……地球の言葉でわかりやすく言えば、
治療不可能なウィルスの様なものだ」

「あのうジエラスさん……。

美紅はなんで平氣なんですか?
あたしは変わっちゃったのに……」

「それ……あたしも知りたい……」

「それは…イーヴァが転生し、
あなたの魂に宿っているからだ」

「その…イーヴァって誰なんですか？」

「前にも言ったが…誰かではない」

「じゃあ…イーヴァってなんですか？」

「……無理だ」

「え？」

「靈力の事も理解できなかつたあなたに
理解できるはずがない…」

「……」

ジョラスの言葉を最後に黙り込んでしまつ美紅そして綵。

『イーヴァは誰かではない』

ジョラスはそう言った。

ではイーヴァとは人間ではないという事なのだろうか…。
彼の言った通り今の美紅には
推測や憶測ですらまともに立てられないでいた。

「とりあえずそんなところだ…。

【時の縛り】が無いこの地にまで影響が出てくるかもしかん…
そうなるとマリスナディアの消滅は免れない
アーダを見つけ出して、あなたが早く覚醒してくれる事を願う

「は、はあ…」

そして、扉は開かれた。

中に入るとそこはさつきまでいた神殿とは
明らかに違っていた。

この空間の周りはまるで宇宙を見ている様だった。
床の材質は確かにさつきまでいた神殿の材質。
しかし段々と闇に溶け途中から見えなくなっている。
壁は無く、幾千の太陽と星が散らばっており
その点が幾つも重なつて薄い霧を作り上げている。

神はここから宇宙や我々人間を見ているのか。

そう思わざるを得ない程、壮大で神秘的な部屋だった。
ジェラスはある所で足を止めるとき床から1m程の
細長い金属的な何かに手をかざした。

上昇て いるのか下降して いるのかはわから ないが
周りの宇宙から遠ざかって 行く。

そして …止まつた。

「マリスナーディア、 連れて 来た…」

「は、 はじ…め

「あ、 あ…あ、 ああ…」

美紅と綵は言葉が出なかつた。

彼女達の瞳の奥に映し出されたもの… それは

人間が絶対に想像できない姿をしていた存在だった。

目で見る… という概念ではない。
心で、 魂で感じる感覺だつた。

宇宙の様に神秘的でありまた恐怖心もあつたが
何よりも涙が止まらない。

悲しみや喜び、 いろんな感情が一気に
体全体で感じる。

これが【幸せ】 というものなのか…。

2人はいつの間にかその場でひざまづいていた。
そうまるで、 全てを悟つたかの様に…。

「 … 地球では立花美紅と呼ばれている。

彼女がどうやらイーヴァのエテリアを宿した様だ」

ジョラスは会話を始めるが美紅達には
独り言を話しているかの様に映る。
美紅も綵も金縛りにあつたかの様に
ひざまづいたまま動けないでいた。
何故か頭を上げる事もできない。

「 …… ああ。 覚醒もしていない。
靈数も微量だ。 … ああ、 そうだ

ジョラスの会話の内容しか聞きとれないが
どうやら自分の事を話しているのかと理解する。

「ああ 彼女も… 昇化させた。

……心配ない、 靈力は安定している。

……わかつた、 本当にそれでいいんだな？」

気がつくと神殿の外にいた。

そう、 美紅と綵は余りにも大きな存在を前にした為に途中で気を失っていたのだ。

ぼんやりと記憶の波に逆らうが何も思い出せない。

現実か夢なのかも区別がつかない。

そんな状態の美紅と綵にジエラスが声をかける。

「気がついたか…」

「……あ…………！」…………は…」

「……神殿の前だ。 そのまま聞いてくれ…」

「…マリスナデイアはあんた達に浄化を頼みたいのだそうだ」

「じょり…」

「… ょり… か…」

「はあ…。 いいかよく聞け。

あんた達の地球は今マリスナデイアの影響が強く出始めてきているんだ。

このままだと人間の存在そのものが危うくなる…。

だがデウスはまだ【器】を手に入れていないから
とりあえずは安心していい…」

「……」

「……」

「…今からゲートを使って【ニガルベイム】へと向かう。
わかつたか?」

「……はい…」

「…おいしつかりしてくれ。
はあ…。…じゃあ…ついて来い…」

神殿を離れ庭園へと戻った3人はゲートを使って
再び最初の空間へと戻つて来た。
マリストナディアの空間から解放されると
少しづつ正気を取り戻す美紅と綵。

「あの…ジエラスさん…」

「……何だ」

「…浄化つて…何するんですか?」

「…それは実際にニガルベイムへ行くとわかるから」

「……あたし……も？」

「……そうだ。」これはあんた達2人にしかできん」

話しながらもジョラスはニーヴルヘイムへと繋ぐゲートの準備を進める。

「【時の縛り】がある世界のあんた達だからできる事なんだ。俺は一緒に手を貸す事はできんが……」

「じ、 ジュラスさん一緒に行かないんですか！？」

「【行け】ないんだ」

「……美紅」

「心配しなくていい……」。

【ハート】といつ者か引き継ぐ事になつてゐるから

そして再びあの床を形成したジュラス。

美紅と綵が一緒にワープできる様に2つ作っていた。

「行き先は既にニーヴルヘイムへと合わせてある……やリ方は同じだから」

「……わかりました」

「向こうに着いたら泉に向かえ。

巨大な大木のそばにあるからそこの田印にして行くんだ」

「はい…」

2人は透明な床に乗り靈力を手に集中させる。

「ジエラスさん…その…。

いろいろとありがとうございました」

「ああ。 ジヤアナ

「あ、 あ、 ああの…」

「……なんだ」

「え、 ええ、 えとお…。

ま、 まままたあ…会えますよねえ？」

「…何故だ？」

「え、 い、 いやあ…そ、 そその…」

「はあ…ジエラスさん、 それ口癖なんですね…」

「あ、 や、 ややつぱり、 なんでもない…ですう。

あ、 あはははは…」

「…？」

2人は靈力を放ち、

光と共に消えた…。

episode 08 ニヴァルヘイム

地面という地面、全てが氷で出来ていた。

しかし不思議と寒さを感じない。

触つてみるとそれでも冷たい氷。

そんな矛盾で出来た世界にやつて来た美紅と綵。

彼女達は今、ニヴァルヘイムにいる…。

ニヴァルヘイム
N i f l h e i m r

-ラピュラリス -
氷界ニヴァルヘイム

2人は辿り着くとすぐに見つけた。

【巨大な大木】とジエラスから聞いていたが
どうしたら木がこれほど成長するのかと思うぐらいの

巨大さだった…。

大木の幹はまだ先にあるにも関わらず
葉は2人の頭上を覆つていて。

葉の隙間から空が見えるがまるで網だ。
それに氷で透けているので地面の中が覗けるのだが
凄まじいまでの巨大な根っこが
この世界全てに張り巡らされている。

「今……思えばさあ 美紅」

「ん~？」

そんな地面を眺めながら大木の幹を目指す2人
会話は移動しながら続く。

「あたし達地球で唯一生き残った…人間なんだよね…？」

「……そつか。みんな変わっちゃったからね…」

「な、なんかさあ、あたし達って
運がいいのか悪いのか…わかんないよね」

「…だね」

「そりやね…助かつて変な化け物にならなくてすんだけど
この状況も素直によかつたって思えないじゃん？」

「まあ……ね

「……地球に帰りたいな

「……でも、化け物いるんだよ?」

「もうだけど……」の「づ? なんだづけ?」

「ニギルヘイムー」

「あ、 それそれ。 とかさ、 せつしきの神様のとことか
ちよー綺麗だけど… なんかさ…」

「うん……綵つちの言いたい事わかるよ

「はあーあ…マック行きたい」

「あ、 あんたね…。
ダイエット中だからって

「この前誘つた時断つたじやあん…!」

「「」んな事になるんだつたら行けよかっただよ…

地球からやつて来てどれくらい経つたのだらつか…。

一日、 一週間… それはわからない。

【時】が存在しないので感覚でしか掴めないが
綵は既に限界がきている様だ。

地球そのものにホームシックを抱く

その気持ちは彼女達2人にしかわからないだろう。

「…綵つち頑張ろ

あたし達超能力使えるようになつたじゃん…」

「それつていい事?」

「い、いい事かはわかんないけど…
絶対経験できない事できただでしょ?」

「あ、あんたいつからそんなポジティブ人間になつたのよ」

「まあだからさー、頑張つていこうよ!
それに2人いれば寂しくないじゃん!
最強コンビだよ」

「そか…、そ、だよねえ…!
な、にブルー入つてんだろーね
あはははは…!!!!」

「（ふう…やつと立ち直つたか…。
綵つち…人が落ち込んでる時は気にしないのに
自分ん時だけ深刻になるんだからあ…もう）」

元気を取り戻したところで大木へと向かう。
あれだけ悩んでいた綵の立ち直りは早かつた。

「てか…ちょーでかくない?」

「でかいでかい……。見た事ないもん……」

「あ……泉が見えてきたあ。あそこだよね？」

「そ！ 走る？」

すると驚きながら急に立ち止まつた綵。

「……美紅つち、それ意味わかつて言つてる?
高校ん時にクラストップの実力を持つた
月島綵菜に挑むつて事だよ？」

「高校の時でしょ？ 何年も前じゃん！
それになんか調子いいんだー」

そういうながら両足を軽くついて跳ねると
それを見た綵の闘争本能に火がついた。
軽くムツとしながら走る準備を整える。

「言つとくけどあたし、マジでやるからーー。」

「いいよーー。あたしもマジだからーー。」

氷の世界—ヴルヘイム。

こんな地で徒競走が行われようとしていた。

異世界での徒競走、間違いなく人類史上初となる。

「いい?」

「いいよ」

「よーい……。」

「どおーん!ー!」

スタートと共に一気に差を広げる綵。

大木まではおよそ200㍍といったところ。

美紅が段々と綵から離れて行く。

「はあはあはあ……ほ……ほら……はあはあ……
だか……り……はあはあ……言つたん……だよ……」

「はあはあはあ……(は、はや~!ー)」

綵は残り100㍍を切った。
美紅はまだ追いつけない。

「はあはあ……（ん？）……待てよ……（」

「み……みぐーーー！　はあはあはあ……
そーんなんじや勝てないよー」

綵が振り返りながら走っている時だった。
いきなり美紅のスピードが増し、追いついて来たのだった。

「へ、うそお……！？
はあはあはあはあ……」

綵もスピードを上げるが比ではない。
すぐに美紅に抜かれてしまった。

「づつーーー！　あ、あんたはあはあ……
な……なん……はやすぎーーーー！」

綵があと残り20mという時
美紅は既に着いて待っていた。
そして遅れて着くと氷の地面だとこいつのに
そこへ倒れ込んだ綵。

酸欠状態で倒れた体勢のまま言葉を零す。

「はあはああ…んた…なんでそんな…
は、はやこの…はあはあ」

美紅にはまだ余裕があるのか中腰で言葉を返す。

「綵つちー なんであたし急に速くなつたかわかるー？」

「わかるわけない…じゃん…はあはあ…しゅう…」

「んーつー！」

「はーーー！ これだよーーー 綵つち 」

美紅の全身が靈氣で包まれている。
靈力を使つた事はそれで理解できたが
どうやつたのかが知りたい綵。
スタミナが回復して起き上がると
自分も試してみたいのか美紅を問い詰め出した。

「だから…全体に届く…あ…出来たそれそれ…」

「マジだ…ちょーみなぎるー…
てかあ…美紅つち反則じやあーん…ーーー」

「えー反則つて靈力なしつて言わなかつたじゃん…ーーー」

「靈力なしなんて考えつかないって普通……。」

「ま、 まあ……。」

あ、 誰か来る……？」

「誰…？」

泉からこじらへ向かつて来たのは
赤い髪の男だつた。

たるんだ腹を揺らし走りながら声をかけた。

「よく来たねーーー！ 美紅ちゃんってのはどうひかへー。」

「は、 はー。 あたしです……」

「じゃあ君がイーヴィアのエテリアを宿した女の子で……」

「あ、 ああ綵菜です……」

「綵菜ちゃんね！ 2人共よろしく

あー あいつ僕の名前聞いた？…」

「…ハート…さん…」

「え？ い、 いの人があーーー？」

「え？ よりしきねえ綵菜ちゃんー。」

「な、なんとか…ジエラスさんと全然…か、感じ違います…よねえ…」

「あんな暗い奴と一緒にしないでよー。」

「これからは俺が君達にいろいろ教えるからー。」

「あ～あ…ジエラスあ～ん…会いたいよお～」

ハートの案内で泉の前へつやつて来た2人。周りは氷だらけだと叫うのにこの泉だけは凍つていなかつた。

泉のすぐそばには小さな洞窟の様な空洞があり地下へと続いていた。その中に入つて地下へと降りて行くハートと美紅達。

「ハートあん」

「なにー? どうしたー?」

「ハートさんはジエラスさんどうじつこうじつ関係なんですかあー?」

「ん? どうこう関係?」

「え、えっとー、お友達かなあ…つてーー」

「ん～簡単に言つとそつだねー」

「あのう…淨化つてなんなんですか?」

「え！？　まさかあいつそんな事も教えないでよ」したのー！？」

「「」うち来ればわかるって言つてましたけど……」

「あ…あいつ…！」

そつかー。　じゃあ、　教えてあげないとね　」

「は、　はい…」

「（だ、　だめだあ…全然やるきでない…）」

「今から君達は地球に帰つてもうりうただけどー」

すると継はさつきまでとは態度が

ガラリと変わりハートの話を熱心に聞き出した。

「え！？　地球にいーー？」

マジですかあ？？　こつですかそれいつ帰れるんですかーー！」

「ま、　待つて…順番に説明するから」

軽く咳ばらいを済ませると2人に説明を始めた。

「まず、　浄化について言つね！

浄化つて言うのはマリスナディアの魂紛で変わった人間…

僕達は【ダスト】って呼んでるんだけど

ダスト達をある武器を使つてやつつけて欲しいんだよねー

「…どんな武器なんですか?」

「それはねー、あ、着いたからとりあえず入つて!」

地下の一一番奥には部屋がありその中に入ると
部屋の真ん中に宙に浮いている握り拳ほどの
玉があるが、それだけで他は何もなかつた。

「ま、ま、君達に武器を作つてもうわないとダメなんだー。
淨化の話は後でいい…?」

「は、はい全然…」

「武器を作つてどうするんですかあ?」

「は、はいこれ!」

それに靈力を送つて作つてもううんだけどー」

するとハートは銀色の腕輪を2人に手渡した。

「え、普通にこれ…腕に付けるんですか?」

美紅が腕にはめると腕輪が丁度いい辺りまで縮小した。

綵にも同じ現象が起こっている。

「縮んだあ……」

「うん、もう取れないからね

「え？」

「じゃあ作り方言うねー！！

君達はもうジエラスに靈力教わったみたいだから
すぐわかると思うんだけどどうくり説明するからね！
まずイメージでどんな武器にするか想像してみて！」

「イメージで…」

「へへ、あたしはもう決まったあー」

「はやつ…………うん、

これしか思い浮かばない」

「イメージ出来た？

じゃあ腕輪に靈力送つてみてーー！」

2人は靈力を腕に集中させた。

青白い靈気が段々と腕に集まると腕輪に変化が起きた。

「腕輪があ……」

「光…つた」

「そりゃー… やつぱコソ掴んでるから早いねえ
じゃ次、イメージした武器の名前を決めて呼ぶんだ！
あ、物質化も一緒にねー！」

「名前…ですか？」

「えーなんにしょー」

2人は考え込んでしまった。

「それがイメージした武器を認識する為のものになるから
決めたらもう変えられないから注意してねー！」

「アーン… ますます考えりゃつなあ…」

「決まらないなら僕が決めてあげるよ?
どうしようか?」

「あたしー、じゃあお願ひしようかなあー」

「ほんとー!?
じゃあちよつとイメージ見るねー」

やつぱり綵の腕輪に手をかざした。

「……なるほど。カツコイイ武器だねえ
ん、じゃこれで……」

「なんなんですかその…ゲツ」

「ち、
せぬ…」

「…じや緑菜ひやんやつひよーーー。」

「（…名前を言いながら靈力だね…名前を言いながら…）

げ

月影刃！！！』

すると綵の腕輪が強い光を放ち光から刀が現れた。
いつの間にか手に握っていた。

「ああ！！ 出て来たあー」

「刀だー」

「カツコイイよね〜

美紅ちゃんは？」

「でかちょーかるいんだけどーーー！」

綵は少し素振りをしてみた。
その素振りなのだが、かなりしつかりと
力強く振り下ろしている。

「そか、綵ずっと剣道やつてたもんね」

「よつ！ ほつ！ そつ
だから刀〜」

「ほらー！ 美紅ちゃんも決めないと〜」

「じゃあ、あたしも決めて下さい」

「お〜 じゃあ腕かして…。
う〜ん ナイスナイス〜 カツコイイじゃないの〜
しかも〜つ？ 大丈夫？ 靈力いるよ〜？」

ハートはそう言しながら靈数を調べ始めた。

美紅の靈数は23。

「この数字が果たして何と出るのか…。

「やーん…ギリギリだねほんと…。
多分その武器は21ぐらいになるから
武器出すとかなり辛くなるよ…」

「もうなんですか…」

「あ……じゃあ提案なんだけど
威力ちよつと落としてみよっか」

「……」こんな感じですか～？」

イメージを変えてみる美紅。

「15ならこけるこける
じゃ、 15なので…」

「……え、 な、 なんですかそれ…」

「こいからいいから…
せ、 美紅ちゃん」

「は…は…」

果たして美紅がイメージする武器とは
一体どんな武器なのだろうか…。

episode 08 ニガルヘイム(後書き)

感想待つてま～す

「セレストレイア！！！」

美紅の腕輪が強く輝き出した。
腕輪から手に光が移り、 その光は少しづつ
形となつていった。

「…あ、 あんた、 それ、 …武器？」

「え？ う、 うん…」

purification

氷界ニギルヘイム

美紅の手に持つていた武器…それは
傘の様なものだった。

「傘つぱこんだけど?」

「えー傘じやないよーー!」

「武器でイメージつて言つてゐのこ
なんでもんなのが出てへるのよー!」

「だつて考へたら頭にこいんなのが浮かんだんだもん」

「美紅ちゃん、

ちよつとそれに靈力込めてみてくれるかな…」

「え、 はい…」

傘の様な物に靈力を込めた。
すると瞬時に形態が変わった。

「…? びびつくりしたーー!」

「す!」おーー! 変形したあー

傘は鋭い剣に変わっていた。

さつきまでの面影が一切見られない変わり様。しかし美紅の武器にはさりにまだ続きがあつたのだ。

「あんたでもうつあつたんじやなかつたの?」

「え? うーん... そのはずだつたんだけど...」

「なに言つてるんだよ綵菜ちゃん
ちゃんとつあるじやん」

「え? どれですか?」

「美紅ちゃん、 もつかい靈力込めてみて」

「あ、 はい。 ん~!..」

するとまた瞬時に変形した。

「あ、 戻つた!」

「それ広げてみてくれるかなー」

「はい..... あ、 あれ? 開かない...」

「違つ違つー、 瞬力使って」

「靈力を込めてみると傘は開いた。」

「それがもう一つの武器だよ」

「え？ な、 なんですか？」

「何這つてんの、 盾だよたーー！」

「ああー」

そつ言いながら傘を回しながら自分の作った武器を眺めた。

「実をさりとね美紅ちゃん

「はーい..」

「その武器、 6変形するよ」

「え？」

「う、 うーー！」

「でもあたしそんなイメージしてませんけど。」

「イーヴァの影響でやつなつちやつたんだろつねー

「イーヴア…」

「まあ今の美紅ちゃんの靈数では全部扱うのは無理だけどね」

「美紅」

「あんたでもすごい武器作つたじやん！－
ただの傘じやなかつたんだね～」

「えへへ！ まあねー」

「や、 ジやあ今度は武器の戻し方教えるね！
絶対覚えておいてほしいんだけど
戻す時は腕輪をはめてる手に持つててね、
あとは靈力を込めるだけで…」

すると美紅と綵の武器が光になり腕輪へと流れしていく。
光は腕輪に吸い込まれる様に消えた。

その腕輪を見ながら綵はある事に気づいたのだった。

「あれ？ これ…」

「ん？ なに、 腕輪がどうしたの？」

そう言いながら美紅も自分の腕輪に目を向ける。
すると腕輪に模様が浮かんでいた。

「やつをまでなかつたの?」

「それは君達の靈力がインプットされて
腕輪の力が解放されたからなんだー」

「腕輪の力ですか…」

「ううん…あ! 例えば!」

敵と戦つて武器を奪われました

「はい…」

「でも敵は君達の武器を触れないの
何故ならその腕輪の力で護られてるから」

「へえー、じゃあーあたしだけにしか使えないんだあ」

「例えば…」

「え! ? まだあるんですか? ?」

「ふふ、 そなんだよ

例えば敵と戦つて、 武器が落ちちゃいました。
でも靈力をちょこつと込めるだけで
自分の手に返つてくるんだ
どう? 憎いよねー! !

「便利な腕輪ですね」

「戻し方はもうわかつたよね？
じゃあいよいよ次は浄化についてだね！！」

するとハートは部屋の真ん中にある玉に手をかざした。
玉の一度上に画面の様なものが現れ、
慣れた手つきでそれを見ながら手を動かしている。

「いきなりだとほら、2人ともまだ靈数少ない訳だし…。
ダスト1体だけちょっと浄化してみよっか」

「え？！？」

「も、もしかして戦うんですかあーーー？」

「ちょっと待ってね…あ、いたいたこいつ靈数11だ。
大丈夫 11だから余裕だつて」

「み、みみみぐーーー！あの化け物だよねーーー？」

「う、うん…」

「準備いい？」

「え、え、あ、じゃあちよつとま」

「行つてらつしゃーーい

強い光が地面から現れて美紅と綵は
吸い取られる様に光と消えてしまった。

「まつて…あ、あれ？」

「な、なに？ ど、どー？
ま、真っ白なんだけど…」

すると2人の背後にペチャペチャとまるで水を含んだ雑巾の様な音が聞こえてきた。喉元が締まつた声が徐々に近づいて来る。恐怖の余り後ろを振り向けない2人。

「あ、あ、あや、い、い、い？」など二声も一・一・一。

「ア...ぎあ...グ...ウ...ガ...」

それを画面から見ていたハートは美紅達に声をかける。

「あ、あ、あやあ、せ、やのしか……」
ない……みみたこだだ……だね

ゆっくりと振り返る美紅。
真っ白の何もない空間、彼女の瞳に映つていたもの…

異形の者は
……。

すぐ目の前で今にも裂けそうな口をめいりつぱい広げていた。

「いやあああああああつ……！」

美紅はとっさに靈力を異形のよだれがかつた口に放つた。

「ギヨアツー……ベヤエグ……」

異形の者の口はバラバラに吹き飛んでいた。
ピクピクとけいれんを繰り返しながら少しづつ
動きが止まつていつた。

「はあ……はあ……はあ」

「みみみく、 だだだいじょ「つづふー?」

「はあ……はあ……あ、 あれ……? 变だな……」

「え、 エビしたのー? な、 なにがへ、 へへん?」

あれほど恐怖に感じていた異形の姿をしたダスト。
しかし一戦して美紅の恐怖心は無くなつていつた。

「あれ? なんか…大丈夫みたい…」

「ハ、 ハハハハーー?」

2人共一、 武器でやつつけないと意味ないよ。
そつちにまた送るからちゃんと武器使つんだよ?

わかった？？

「は、はいーーー！」

暫くするとダストが光と共に現れた。
綵はまだ恐怖心と戦っている。
しかし美紅は少し違っていたのだった。

「え、ええっと…名前と靈力…。
せ、セレストレイアーーー！」

すると美紅の手には先程の武器が握られていた。

「グ…イ…あ…げ…ガ…ぐ…」

「うわあつ…！…ち、ちか、ちかいつて…！…
え、えと…！…えとけ、けんけん剣んーーーーーーーー！」

セレストレイアは美紅が思つままに瞬時に変形する。

「イ…グ……がああああーーーーーーーーーー！」

と、いきなりダストはスピードを上げながら

美紅へと襲いかかつて來た。

「おおみくー……」

美紅の身に危険を感じた綵は無意識の内に靈力を全身に解放した。

画面を通して見ていたハートの目が鋭くなる。

「（靈数が28まで上がった…）」

「美紅！待つてて今行くから！！

月影刃つ！！

走りながら武器を呼び出すとダスト目掛けて斬りつけた。

「ギヤアアアアアアアア」

肩から斜めに斬りつけると

その瞬間に焼けた様な音と煙りが上がる。

やしり……鼻からまくらぐと切断されていく。

そのまま倒れたダストは光の玉となつていていたのだ。光は何故か綵の月影刃に吸い込まれて行つた。

「あ、 あら? あたしの武器に入っちゃった…」

それが浄化だよ

おめでとー よく頑張ったね…!-

「あ、 でもあたしの時はならなかつたんですね…?」

だつて美紅ちゃんはそのセレストレイアを使つてやつつけなかつたでしょ?

「あ、 なるほど、 そういうことなんですね」

「美紅、 あたしもなんか大丈夫なつたみたい…」

「よかつたじゅーん!!」

馴れてきたみたいだね

あ、 さつきダストを浄化して

魂を吸い取つたでしょ? 緑菜ちゃん

「あ、 はい吸い取つたみたいですねー」

それは元々マリスナディアの魂紛だから
靈力を増大させる事が出来るよー!!

「あの~、 意味わかんないんですけどー」

つ、 つまりダストをいっぱい浄化すれば

それだけ靈数も上がつて強くなるつてわけ

「え！？ そんなんですかあ」

「じゃ、 次いくよ」

今度はまとめて10体

それ

「じ、 じ、 10—！」

「い、 いくらなんでもむむつむつむつ！」

そう言いながらも2人は着々と浄化を果たす。
そして、何回も何回も戦いを繰り返し続けた美紅と綵は
こんなになるまでに成長しているのだった。

「美紅～また勝負！～ いい？」

「へへ、 負けないよ～！」

「グウヤー！」

「あ……あ……グ……」

美紅ちゃん、 綵ちゃん……
もうそろそろいんじやないかなー。
もう409521体目だよー？
じゅうぶんだつてもーーー！

「じゃあこれ最後にしますー」

「綵、あたし達そんなに浄化してたのー?」

「数えてなかつたから…ほらやるよ」

美紅と綵の周りには数百体のダストがいた。

「綵、いい?」

「うん!」

「よーし…突撃だーあーーー!」

美紅は無数のダストに向かつて走り出した。
セレストレイアを剣に変えてダストの1体に
斬りかかる。

「やあー やあー たあーーー!」

ダストは一撃で浄化され次々と他のダストへと
ターゲットを変えていく。

「ギヨア！！」

「あ…ぐあ…ああああああ…！」

後ろから美紅に襲い掛かるダストだが、

「グア！？ ギシュ…」

ガバニキ

傘に姿を変形させて肩にかけた美紅。

「さーんねんーーーはーーー！」

再び変形し剣に変わると横一閃に薙ぎ払つた。
ダストは耐え切れず消滅する。

「イギヤアア！！！」

今度は美紅の頭上から3体のダストが飛びかかってきた。すると剣はなんと2つに分かれ拳銃となつた。

「それ——！！！！！」

美紅は2丁の拳銃を乱発し素早くダストに命中させるとまた剣へ変形させ次のターゲットに走つて行った。

「……ひざあ

そして綵はとこりと…。

「うわすぎ…！…！」

そればつかじやん！ 少しは学習しなよ…」

ダストに囲まれてしまつていた。

「ふざくねあああああああー！…！」

「ギギヤアー！…！」

「あんた達単純すぎーーー！」

綵の両サイドから飛び掛かつて来た。

靈弾を1体に放つと素早くもう1体の首を斬り落とした。綵が着地するとタイミングよく魂となつて浄化された。

「グビヤア……」

「ギガガガガグゴ……あ……あああああ……」

「そんなんだったりまた、あれやつけりやつよ~。」

そう言いながら綵は月影刃に靈力を送った。
靈気を帶びた月影刃は青く鈍く輝く。

「いっつつけえええ！……！」

綵は月影刃をダストの群れに投げ飛ばした。
月影刃は回転しながらダストを斬り刻んで行き
片つ端から浄化されていく。

そしてまた綵の手に返る。

刀を持つと月影刃は光となり腕輪へと戻った。

「**楽勝**」

まだ戦闘中の美紅は残りあと5体だった。

「あ、綵つち終わつてゐる……。
あ～あ…負けちゃつたな……」

肩を落とす美紅に5体一気に襲い掛かつてくる。

「はあ…またそれか…」

「グゲエゲゲゲアアア…!!!!」

溜め息を零しながらセレストレイアを変形させる。
形態は黒い物体だった。

「（あ、また新しい形態だ…。

あれで美紅4つ目じゃない？

何、あのでかいの…）」

「消えちゃえーーー！」

靈力を込めると黒い物体は筒状に変形し
筒の中に蓄積されていく。

そして彼女と同じぐらいの大きな黒筒を
肩に乗せると信じられない巨大な靈力を放つた。
まるで靈氣で出来たレー・ザー。

5体まるごと飲み込むと全て消滅し淨化された。
放ち終わるとまた傘形態に瞬時に変形する。

そして魂が美紅のセレストレイアに吸い込まれるのを
確認すると光となつて腕輪へと戻した。

「あ、あんた……随分感じ変わったよね……」

episode 10 帰還（前書き）

長いこと放置してたのでコラムも。

『慣れ』

これは良い意味でも悪い意味でも人間の特徴の1つである。
どれだけ高価なダイヤモンドであっても
どれだけ容姿端麗であっても

最新技術が次々開発されて暮らしが豊かになつても
常にその眩しい光を見ていると慣れてしまい
眩しさを感じなくなる。

これは何故なのだろうか…。

人間は常に満たされない『欲』でできた生物。
今よりも明日、明日よりも明後日という感じに
『完全』なるものを目指し、向かっている。
だが離れてしまえば近づけたり、
近づくとまた離したくなる。

そうやつて人間はまた同じ所へ返つてくる。
流行のファッショングが良い例だ。
人間は『完全』なるものを知らない…。
故に人間は完全になる事ができない。

『慣れ』

という不安定要素がある限りこの無限地獄は続くのだ…。

・ラピュラリス・
氷界ニヴルヘイム

いよいよ地球へ帰る事になった。
時が流れていないと、いうのに
果てしなく時が流れた感じがしてならない美紅と綵。
【時】が存在しない世界…それは、
時計の無い部屋の様なもの…なのかもしれない。

「わあそれじゃあいよいよ地球に行くんだけじ」

「美紅～やつたねー」

「うん 綵」

「まだまだ説明しなくちゃいけない事が
いっぱいあるけど君達を地球に送つてから
一つずつ教えるから
じゃあ準備はいい?」

「はい!」 「はあーっ!」

「頑張つてね~!」

美紅と綵は光に包まれフッと消えた。

次に2人が目にしたのは紛れも無く地球だった。
辺りはまだ真夜中、 風で木が揺れる音が
聞こえる程静まり返つていて。

見渡すとブランコや滑り台などがあり
どうやら小さな公園の中にいるようだ。
しかしここが何処なのか…。

要約地球へと帰れた2人がお互い首を傾げる。

（帰還）

The return

「綵…！」

「どうだ？…」

とりあえず公園を出て周りを歩いてみる事にした。
コンクリートの道路に電柱に電話ボックス
そしてしばらく行くと大きな道路が見える。
久しぶりに見る景色にはしゃぐ綵。
しかし美紅は不思議に確かめる様に辺りを見る。

「綵…、なんかおかしくない？」

「おかしいってなにが？」

「だつて建物が一つも壊れてないんだよ？
あんな大つきな地震があつたのに」

「あ！ そういえばそつだ…なんで？」

「わかんない…。

わかんないけどなんか変…だよね？
ダストもいないし…」

「てかさあ、 いじじじおーー。」

目的もなくただ歩く2人。
歩道橋を見つけ上から周りを確認する。

「なんかさ、 夜なのに暑くない?」

「暑い暑い… てか夏? つて感じじゃない?」

と2人が会話しているときなり体が
一瞬ブルッと振動した。

思わずびっくりして声を上げる美紅。
それを見て綵が尋ねると綵にも同じ現象が起きた。

「……なに今の……ひやつ!?
なによこれえーーー!」

「あ、 あやも感じんーーー?」

「ーー? いやあーー! まだーー」

理解不能な出来事に恐怖の余り2人が抱き合つた

その時だった。

お互いそれぞれ相手の腰を触つてみた。

「ねえ……まさか振動の正体つて……」

綵が美紅のポケットに手を入れると……

「なんだあ携帯じやああん」

振動の正体はなんと携帯だつたのだ。
こんなものに怯えていたのかと愚痴る綵。
しかし2人の携帯はまだ振動している。
見てみると着信中と出ていた。

どちらにかかってきているのも番号通知無し。
出るか出ないか迷つた2人はお互いの顔を見ながら
恐る恐る電話のボタンを押した。

「……もしもし」「…もしもし」

あつ！ やつと繫がつたあ…！
んもう早く出てよね～！
無事に着いたかなー？

「ハートさんつー？」「ハートさんつー？」

2人は目を丸くしながら声を揃えた。
どちらも電話のスピーカーからハートの声が

聞こえてくる。

「 われ、 どうなつてゐんですか！？」

「 これからはいつやつて連絡するから
で、 さつそくだけども…」

「 めんなさい…！…！…！…！

いきなり耳の鼓膜が破れるくらいの大声で謝る
ハートの声に同じタイミングで電話を離した。
耳がキーンと鳴る。

2人はまた同じタイミングで反対の耳に変える。

あのね、 時間を操作するのって初めてで
ちょっと失敗しちゃったの…

「 失敗？ え、 どういう事ですか？」

2012年に送るつもりがね… そのう…
2010年…つまり2年前に送っちゃったの
「ええ！？」

でも心配しなくていいから

今わかつたんだけどそこにはダストの反応があるの
ついでに浄化しててくれるかなあ？

「ダストが？ … 何もいませんけど？」

近くにいるって意味じゃなくて
その時代にいるって事。
ここからじや場所は特定出来ないから
君達で探してね

「どうやって探すんですかあ？
てかあ地球まるまるって事ですかあ！？」

「え、 せ、 世界！？」

大丈夫大丈夫！

君達はもう普通の人間じゃないから
世界を探すなんてすぐすぐ
靈力を解放するどびっくりするから

「は、 はあ…」

ダストの反応の捕まえ方を説明するね！
やり方は簡単、 靈数を見るのと同じやり方
靈数の見方わかるよね？？

「あ、 はいわかります」

「うん！ それじやあまた……えーと…
電話するからね

あと、「飯はちやんと食べないとダメだよ?」

「あ、はい…あれ?」

「…切れちゃつた…」

美紅は何気無しに携帯の画面を見ると
日付は2010年7月4日となっていた。

「7月4日か…。

あたし2年前なにしてたつけなあ…」

「綵、とりあえず」「がど」「か調べてみよつよ」

美紅と綵は何か手掛かりになる物を探し始めた。

夜が明けてきた。

数時間歩き続けた美紅達はコンビニを見つけそこで地球へ帰つて来てから初めての人との遭遇である。

自分達以外に人間を見るのが久しぶりの2人は思わず感激してキャッキャ騒ぐ。

まるで芸能人と会つたかの様なテンション。

コンビニの前でタバコを吸つている

中年のサラリーマンに声をかけてみる事にした。

「あ、あのう…えっと、は、始めて…
あた、あたしは…」

「バカッ！ なに言つてんの…！
あはは、すいませえ～ん！
ち、ち近くに駄つてありますかあ？」

「……」

男は黙つたまま携帯を見ながらタバコをふかしていた。

返事を待つてはいたがこちらを振り向く事もない。完全なる無視である。

「あのう、…すいませ～ん」

「綵…他の人にしよ?」

「…うん」

男性を後ろに首を傾げながら綵は美紅に引っ張られてその場を後にした。

周りは住宅地が並んでいた綵は右、左とキヨロキヨロ何かを探している様に家を見ていた。決して何処かに向かつていると言う訳ではないが2人はとにかく歩き、すれ違う人に話しかけてみる。だが先程と同様に皆無視を決め込んでいた。

いや、これは無視ではない。

美紅達が見えていないと言った感じだった。そうそれはまるで2人が幽霊の様で…。

2人がその事に気づくまでには時間は必要なかつた。

「だよね…やつぱり」

「じゃなきゃありえないってシカトなんてさあ

そう言いながら綵は近くの家の前に走つて行くと

その家の前でほつきを持った女性に近寄り女性の瞳に顔を近づけた。

「うふ、ちゅうと向やつてんの～…」

「…ほり、

「～んなに顔を見ても何も言わないんだから

綵はジロジロと女性の周りを見ているとそこに美紅がやつて来て綵の腕を掴んだ

「こつち来なつて…」

「い…痛い痛い！ 痛いって…！」

「う、うめん…！ だつてあんな事するから

「いこじやん別に見えてないんだからさあ

「見えてなくともダメなの」

「…あんた昔からそうだよね。

あの時も無茶してさあ

「あの時つって？」

「あたしがまだ不良ぶつてた時だつたから

中学かな？ イジメられてた子をあんたが
かばつてボコボコんなつてた時あつたじゃん？」

「あ～あ、あつたあつた！あの時か。
それで偶然綵達が通りかかって助けてくれたんだよね」

「正義感がバカみたいに強いってゆーか
そういうの許せない性格だよねあんたは」

「……それ、褒めてんの……？」

「一応褒めてるつもりだけど」

そんな話をしながら2人が歩いていると
前から白髪の老婆が杖をコツコツと
地面を突きながら向かって来ていた。
2人は会話をしながら老婆とすれ違う。

「…待ちなさい」

いきなり老婆が話しかけて來た。

振り返ると腰が曲がった老婆の背が見え
もつさりとした動作でこちらを向いた。

「美紅と綵菜つてのは…

あんた達かい…？」

その言葉につい嬉しくなつて綵は即座に返事をした。
地球に来てから何人かの人を見てきたが
話かけられるのは初めてだつた。

しかし何故この老婆は2人が見えるのだろうか。
美紅も老婆に返事を返しその疑問を投げかける。

「あたし達…見えるんですか？」

「…見えとるよ。

あんた達“ダストブレーカー”なんだろ？」

(ダストブレーカー?)

(たぶん、ダストをやつつける人達つて事だよ。
だからあの事を言つてるんじゃない?)

2人でコソコソとやり取りをしてる内に
美紅は自分が言つた言葉に引っ掛かり
疑問が再び頭に現れた。

「…あれ?
どうして知つてるんですか?」

「……」

老婆は沈黙を決めたまま口を開かしてしまった。

突如2人の前に現れた白髪の老婆。

驚く事に彼女の目は両目とも失明していた。

ならば何故2人を見る事ができるのだろうか？。

そして彼女は2人の秘密を知っていた。

美紅と綵は老婆に連れられて二階建ての
小さなアパート前まで来ていた。

アパートの壁は所々にひび割れがあり家の扉は
茶色い鉄製の扉。

その扉を開けて中に入つて行く老婆の後を2人も続く。

「おじやま…します」

「（え…？ 何もない…）」

中は6畳の部屋が2つ、 タンスや机などの
家具は無く黒いレザーのソファーガ一つあるだけ。
キッチンからも生活感が感じられない。
本当に何もなかつた。

老婆はゆっくりとソファーに腰を下ろした。

「それで…じゃあ改めて自己紹介しようか」

「管理人」
Soul manager

「アパート」

2010.7.4
am9:07

「私はネル。
ダストブレーカーを管理する者。
つまりあんた達の管理人だよ」

「は、はあ」

「ネルさんの事は聞いてませんけど…」

「あんた達ハートに言われて来たんだりう~」

「はい。 そうです」

「あ…全く」

「？」

ネルは溜め息をついた後しばらくして再び話し始めた。

「よく聞きなさい。

ダストはあんた達の手には負えない」

「え… でもあたし達…」

「確かに靈数を見るとそれなりにはやつていける。
でもダストは元は人間なんだよ。

…私が何を言いたいかわかるかい？」

「…………」「…………」

「ダストは色んな種類がいる。
中には人間を装つているのもいてるんだよ。
例えば命乞いするダストを
あんた達は浄化…つまり殺さなければならぬ。
人間を殺すと言つても過言じやない…。
事実本当に人間だからね」

「でもあたし達が戦つたのは化け物だったですけどお……？」

「あんた達はダストの初期段階に過ぎない。言つただろう？ ダストには色々な種類がいると人間と変わらないダストをあんた達はやれるのかい？」

「そ……それは……」

「あんた達がダストブレーカーになるにはまだまだ早過ぎる……」

2人は黙り込んでしまった。

ネルは彼女達の顔をじっと見つめると両手を差し出して「いつ告げた。

「あんた達の靈力を全て私に渡すと普通の魂に戻り天界へと導かれてそこで幸せに過ごす事ができる。

強制はしないがあんた達の為に言つておるんだよ」

「で……でも地球が……」

「ダストの事なら心配はいらんよ。ジーラス達ならきっとやつてくれる。

あんた達は自分の事だけを考えるんだ」

ネルの言つ事は正しいかも知れない。

自分達は命乞いをしている人間が田の前にいたら
例えそれがダストであつたとしても

果たして浄化する事ができるのだろうか。

いや、2人ともできるならこんな事やりたくない。

「人間と言つ生き物は決して強くはない。
皆誰もが平和を願い生きているんだ。

ダストブレーカーとは常に恐怖に怯え
恐怖と闘い、そして恐怖を知る…。

あんた達にはそれだけの器が整つてるのかい？」

「…本当にやめてもいいんですか？」

「…それは自分に問い合わせなさい。
決めるのはあんただよ」

「あ、あたしつ…」

話の途中で綵が言葉を発した。

「あたし…渡します。

」んな事しなくていいな…したくな…」

「…あんたはどうするんだい？」

「あたしは……」のままでいいです。
ダストをこのままほつといて…
地球の皆があんな化け物になつたままで…
自分だけ幸せに過ごすなんて」

「美紅…」

「その事なら心配はいらんよ。
ジエラス達が何とかしてくれる」

「そうだよ美紅
ジエラスさんの靈数知つてるでしょ?
あたし達なんかにはやつぱり出来ないんだつて
あんたが特別な何とかでもね」

「綵……」

美紅は綵の顔を見つめた後目線を落とす。
綵の言う事も十分わかつている。
だがどうしても踏ん切りがつかなかつた。
ネルの差し出す手を取れば楽になれる。
これから訪れるであろう恐怖は消えて無くなる。

クッキーを持つていて食べようとした時
お腹を空かせた子供がそばで見ていたら
自分の物だからといって食べてしまい満足するのか
それともその子供に渡して苦痛を得るのか…。
その感覚に近い状況だった。

他人なんて所詮は他人。

しかしある出来事がきっかけとなり
子供は生き延びられるかもしれない。

ダストを浄化する事は苦痛であるに違いない
まだ体験していないが初めてダストを見た時の
あの恐怖はもう2度と経験したくはない。
それでもその恐怖の先に救える何かがあるなら
自分の行動で救える命があるなら
このままダストブレーカーになるのはそんなに苦痛ではない。
美紅の意志は固かつた。

「やつぱりあたしはダストブレーカーとして
このままダストを浄化していきます」

「美紅……」

「綵、別にあたしが特別だからとか
責任とか…そう言つんじゃないの。
本当に自分の意志だから」

「…………そり」

「だから綵は綵の考え方で決めてくれていいからね。
別に気を使つて残つてくれたりとか
しなくていいんだよ
綵の気持ちもわかるし」

「……仕方ないなあーもう。
ならあたしも残るよ」

「だから気を使…」

「気なんか使ってないよ。

あたしももう少し頑張ってみよーって思つただけ」

「嘘だよ、 だつてさつさ…」

「嘘じやないよ美紅。

綵菜は真実を言つてる」

「確かに怖いけどさあ…

でも… 2人なら大丈夫な感じするじゃん?」

「じゃ あもう一度だけ聞くよ?」

どんな結末が待つていたとしても
あんた達はダストブレーカーとして
歩んでいくんだね?」

ネルの質問に2人はお互の笑顔を瞳に入れた後
しつかりと頷いた。
するとネルは少し黙り込むと一言告げる。

「2人とも…

「合格だよ」

「え？ 合格？」

「… 合格つてどうこいつ…」

「こ」れはあんた達の意志を試したテストだったのさ
ダストブレーカーは生半可な気持ちじゃできないからね

「テスト?」

「あんた達はダストブレーカーとして認められた。
これで安心して地球に送れるよ」

ネルは杖を掲げると景色がじんわりと変化していった。
辺りは暗闇で埋め尽くされる。

ここはラピュラリストだったのだ。

「え? ジヤあハートさんが間違えて2010年に
送つたのも…全部演技だつたのぉ!…」

「じおりで変だと思つたよ。
だつてみんな無視しちゃうんだもん」

「そうだよ美紅。

実際にあんた達が地球に戻つても同じ現象になる。
あんた達は靈体だからね。

さつきの地球はシミュレーションとして

忠実に再現してある。

実際に行くとあんた達が体験した事がそのまま
本当に起つるんだ」

「じゃあ戻れても会話できないんですね…」

「肉体を取り戻せば会話は出来るが
今はそれを教えてやる事はできないよ」

「靈力がたくさん必要だからですか？」

「靈力はほとんど必要ない。

肉体を持つと言つ事は危険が大きいんだよ
今はまずダストの浄化に慣れる…

それだけを考えなさい」

「…わかりました」

「慣れてからでもいいか」

「あと、ハートに代わって今後は私が
あんた達の面倒を見るからね」

「はい。よろしくお願ひします」

「お願ひしまーす」

「まずは地球に行つてダストを浄化して来る事。
ダストの初期段階…ダスト1st

通称D-1と呼んでいる。

あんた達はD-1の浄化とまだダストになつていない
人間の確保、わかつたかい？」

「え？ダストになつていない人がいるんですか？」

「中にはいるんだよ。
魂紛に触れさえしなければね…」

「見つけたらどうすればいいんですか？」

「美紅がその人間に触れると魂紛の影響を受けなくなるからとりあえず周りのダストを浄化したら安全な場所へ移動する。指示はまたその時に出すから」

「わかりました」

「これで本当に本当の地球に帰れるんだね」

「…みたいだね！！」

「頑張ろうね！ 美紅！」

「うん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6247f/>

ETERNAL SAGA genus.

2010年11月24日16時19分発行